

役者評判記

ナ13
3849
126



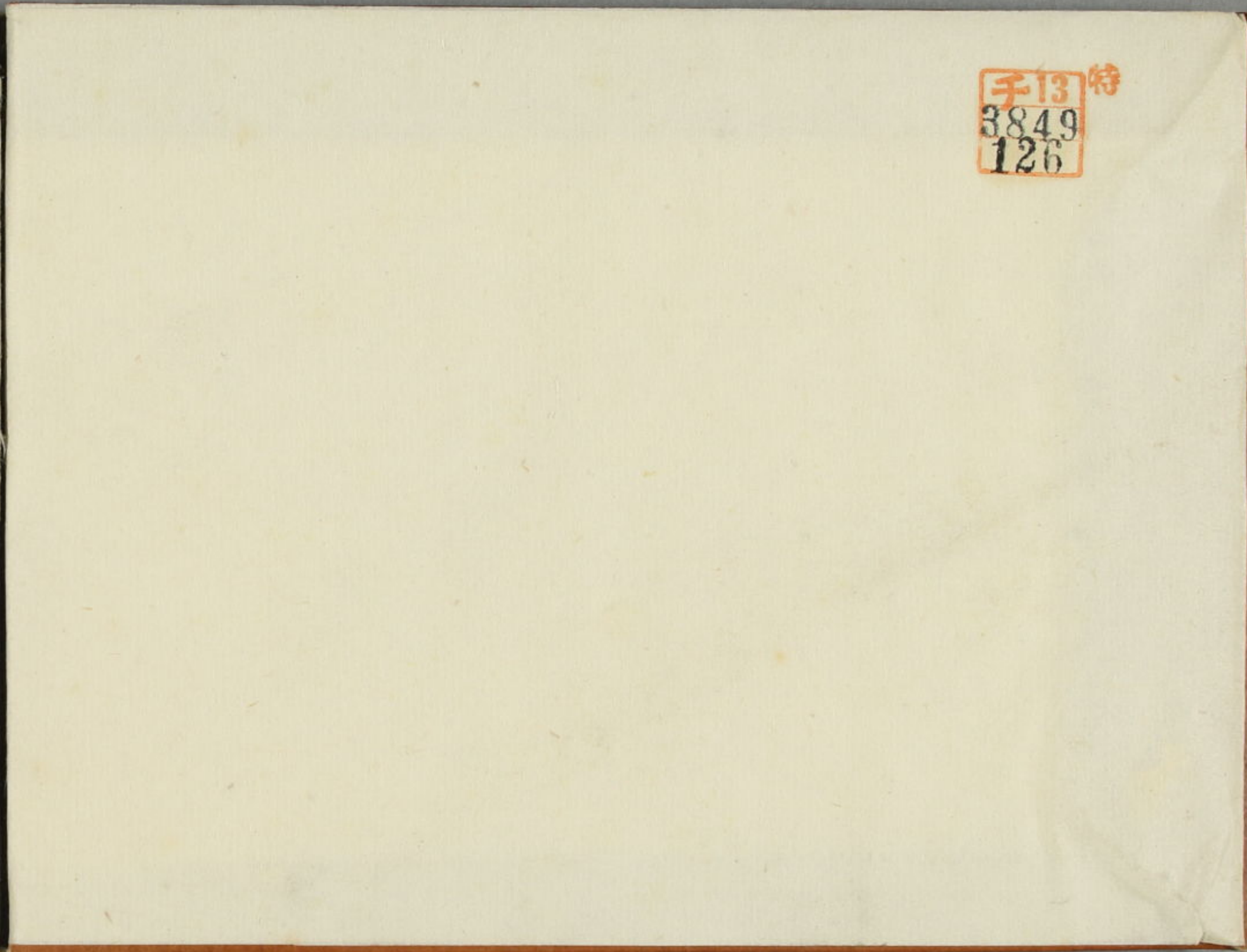


中居の俳優評判記
 初狂言

書目	評判記
冊數	3
番號	342
箱號	2
架號	
備考	

多
 1039
 49

特
 3849
 126





唯一の大戲場にて三役揃ひし淨旦丑各
 名得意の伎を奏し箇の活劇を演ずるのみと
 様な假聲で古今の事跡を見物するに
 儲るふ計りは往かぬ者何時も悪人亡失せ善
 人榮へて芽出度く評判じゃくと打出す
 都合に仕組であれば古往今來不平と云ふ否
 な病氣は起るまいに注文通りに忝らぬが則
 活劇の活劇たる處歎くこと旨く切はめて勸
 善懲惡小氣味よく大詰めの公案で判断のつ
 く紋切形是によつて見る時は世の活劇より
 擬劇の方が余程脚色が旨いやうなが又造化
 の腹中には如何した草稿がある事やら肉眼
 では見取れねば活劇の評判は活眼家に譲て
 のけ矢つ張擬劇の評判を擬眼でやるが俗物
 社會の仕事じゃと云ふ下から若しく先生
 活眼は解つて居れど擬眼とは如何云ふ事と
 一本横箭を入られて抜からぬ顔の負惜しむ

擬眼とは眞似る眼則ち見眞似と云ふ事よと
故事つけては置たれど此評判記を東京の擬
と迄は決して申さざ抑々〜と大袈裟に出掛
る程の事でも無いが役者評判記は此地が本
家正真正名の黒表紙黒人連の筋見藝見顔見
容見淨玻瓈の鏡に懸て見抜た評判打扮授伎
道具立間拍子の調子まで剩さぞ漏らさぞ記
載たる一劇場の品定め坐頭株と背負込んだ
徐々巷兒貴が役割で陰を打つと云ひ附られ
れつと任せの打附書是がほんまの魯（では
なる）序文擬ひ唱采の聲を樂屋からかけ幕
ほりすと云ふ者は劇場に目のない

華顛道人

附言

○當評判記ハ其昔當地におゐて八文舎が年々著せし評
判記ハ体裁に倣ふといへども専ら藝評れみを記さず傍
ら該狂言粗略に脚色をも書加へぬ是ハ該狂言を見ぬ看
客も概略なり脚色はわかるややせんとれたためなり
○脚色を並べるにわ是非とも折目切目せりつハ挿入
れねハならぬ筈なれども冗長に涉りて看客れ見倦一た
まわんまどを恐れて只にり脚色れみを記し稀に（誰）
と仕たるとするハセリつなれども元より諸記のまゝを
記せもれなれば舞臺と多少の差異あるハ云に及ハず誤
りも亦多かるべし

○従來八文舎が著せし評判記ハ（全体此お人に此お役）
ハあど〜尤も役者を尊敬して書たるもれなれども余り
（御）の字の多さも字るさなれハ省さぬ御取負様方失敬
なる記者と叱りたまふな
○従前の評判記ハ（芝居好）（ヒイキ）（わる口）（ちとら）
（見功者）（頭取）杯と種々の者が出て討論駁議せる体に
著述たるものなれ共其實ハ一人に於て書一物なり然る
に當評判記ハ實際江湖諸君の意見を問ひ各種の投書を
編輯せしものゆゑ古体の「芝居好」「ヒイキ」「見功者」等

の名義を用ゐるを其代りに只〇と△とを以て社中の評と各家の投評とを區別せ但し〇ハ社中の評△ハ投書家諸君の評かり

○一幕毎に役割を置たるハ口上言の出る格にて其場の見易さための設なり但し役者の順次ハ番付役割等の位置に随ふ

○八文字屋の評判記ハ前にも云一如く一書に纏て記し物ゆゑ藝評ハ名題役者のみを記きたれ共上等俳優以下大部家にも是非賞たさのあり悪く云たさのあざば茲に役者の等級を論せそ一幕あは目目覺へたる限り評言を下すものなり

○當狂言の素より一月狂言にて役者尤も不揃のよどゆる位付并に兄立惣目録等の態と記さず何れ二の替狂言一座顔揃ひ興行の日をまちて一座々々に分て記せば一爰に當一座の中に就て其萃なる者のみを抜き春季の古句を附して贊辭とかし見立代りの一興に備ふ

○本編の評の如さわ敢て舊格古例に拘泥す只々今日吾輩が一見せ一目と諸君の投書とに據て漫に言を吐くものなれば到底自分極の責免るべからず江湖劇場道の古實家諸君記者が粗漏杜選を叱咤せず只々兒女輩に芝

居のお咄をさるもれと見許(玉)

○當評判記の多く投書の助に依て編製する物なれば以降狂言毎に諸君玉評を吝す陸續御投與わらんことを伏して希ふ

編者謹識

嵐 璃 笑

〔立花屋璃笑〕

中 村 飛 鶴

〔松鶴屋立鶴〕

鯛の目にひとほれもつや春の雪

ますのはるちいさのりーが芋頭

嵐 璃 幸

〔葉村屋含翠〕

とばーるも顔に匂へるなづな哉

嵐 橘 市

小坊主や松にのくれて山ごくら

中村珊瑚郎

〔末廣屋仙子〕

みなくに咲うるいねと梅の花

市川市十郎

〔小紅屋眼玉〕

おほはいに大佛殿ののぞみかな

中村傳五郎

〔成駒屋米鶴〕

鶯れ身をさかしまにはつ音かな

嵐 小 笑

なぞいされ門徒坊主の水いわひ

大谷龍左衛門

〔明石屋〕

かざり木にならで年ふる柏かな

中山文五郎

〔鬢附屋眼笑〕

鶯れまへさ、まゐれど一おどよ

中村紫琴

〔播磨屋紫琴〕

かほに似ぬ發句もいでよはつ櫻

嵐橘三郎

〔伊丹屋橘三郎〕

はるもや、景色と、のふ月と梅

前狂言ハ

甲斐の信玄
越後の謙信

ほんてうにトウーまぢ
本朝廿四孝

第壹

信玄の本館に忠臣の替子

第二

甲越の國境に信義の捨子

第三

勘助の閑居に孝心の筍子

第四

勝頼の繪姿に貞操の號子

○序幕の評する程のまどもなれのお預り

○二幕目役人替名

慈悲藏	中村飛鶴
女房唐織	嵐璃幸
奴宅内	尾上當見治
同可内	中村嘉吉
高坂彈正	中村傳五郎
奴百助	市川龍五郎
同沓藏	市川龍助
越名彈正	中山文五郎
女房入江	中村紫琴

○桔梗原捨子の場

甲斐越後の仲間等が領分の境論お定の紛紜がそむど
 爰に信州筑摩郡の邊に住む慈悲藏といふ者あり生得親
 お孝心の道に昔の郭巨にも云々のチヨボに連て慈悲藏
 の出○衣裳萬端お定りにて申分おし仕道にて誠や人間
 の吉凶の云々の長文句より本舞臺へ掛り憂ひの間より
 ト、子を捨るまでの處△十分に愁嘆を見せて婦女童幼
 の鼻紙を湿させました慈悲藏といふ假の名の實の名
 に玄負長尾家の軍師直江山城之助とも呼る、程の豪
 傑が親への孝行兄への義理且に軍法傳授の大望あるが
 爲に思ひ切て子を捨るとあるなればあまり顔や体で泣
 づお成丈心で泣て見物の袖に絞らせる仕打が仕てもら

ひ度い眞實の情愛が薄いやうよ見へ殊も三十の上は漸
 々ニツか三ツかといふ淨瑠璃の文句に合しては男振の
 好いせいか知らねども顔の化粧が十をかりも若く子供
 のある人どと請取悪いやうで五坐りました○ツツ理窟
 と併べればなふべされるやうなもの、年功を合せて此
 位い愁嘆か利を此場の慈悲藏と先ツ上出来と謂つても
 決して不公平とは申され升まい○此處へ妻唐織と連て
 出になる甲斐の執權高坂彈正捨子に眼を注げ小袖のく
 け紐お附たる下札に甲州の住人山本勘助と書してある
 れを見て勘助を味方に入信玄公へ好さ土産と心に喜
 ぶところ今少し仕打がありそふなもの△夫不例と違つ
 て五分月代は錦の上下もゑ何とやら恐らしく見へてわ
 るかつた○折柄高坂殿暫くと聲を掛て越後の郎等越名
 彈正が妻の入江を同道で此場へ顯れ夫より四人は者の
 捨子に取合越名彈正は元より此人に當らぬ役前もゑト
 ヤカツイふれと評者が無理○高坂彈正と前も謂つた
 仕打も言語も輕過て一向よ見ごたへなく○入江と流石
 年功丈あつて先ツ大体△唐織之形の小作りおの毛音聲
 の優いのも顔の愛敬のあるのも天質もゑ仕方もないが
 ドウも入江に負そふよ見へて氣が揉め且ツ仕こなし萬

端可愛らしそきて高阪の妻とて見へずドウ見てもお腰元のやうで五坐いまして○然し夫は皮相かゝ見たところ年功の入江を相手お始終見戻りなく競争れたところ中々甘いもの△高阪唐織ともト捨子を連れて引込のところは少し情愛が見へてマヅく○後に紫琴が病気で璃幸が入江お廻り若菊が唐織を勤めしが相場たけのもので此うなると雙方可成に見へます△然し紫琴の入江から見ると相場と余程下り又唐織は例のベタツクのと外輪の足でチツト閉口○トはいふもの、此人が此位いに出來やうとと思ひの外く

○三幕目役人替名

慈悲藏	中村飛鶴
長尾景勝	中村珊瑚郎
妻唐織	嵐璃幸
百助	市川龍五郎
百性藤五郎	市川龍助
母越路	市川家幸
女房お種	中村紫琴
横藏	市川市十郎

○勘助内の場

○慈悲藏の女房お種兄横藏の子次郎吉お乳を吞せ寐かしつけている折柄立寄る二人の百性を相手お挨拶としている處年頃といひ容子といひ拵へ萬端先一ト通り好し○處へ母の養にとて溪澗の魚を漁て戻る慈悲藏二人の百姓の兄と母とと誇る挨拶と聞てア、これ物体ないと云て下さんそる譬へ身を粉に碎ても胎内あるから今日迄の親の苦勞にくくべて見れば百分の一云々の言語で二人を感動させるところより次郎吉も寐入ったかどの言語を聞て吾子峯松がことと言出し兄横藏の不人情を恨みてさまく掻口説く女房が愚痴を論しながら母の身の上と氣おかけ奥の一間と窺ひく母の裏も出ているお驚き奥へ這るまで篤實にして孝悌の情は厚い仕打申分なしお種も好くこなされて申分なし○此處へ來か、る長尾景勝が花道の中央よてチヨット玄徳が孔明の草薙と顧みし古事を思ひ出したる文句わッて本舞臺へかゝり内の様子を窺ふ處さしたることおそれれば隠分大舞臺見へました然しまだとこやらが○東西々々夫より母の越路と慈悲藏も助られて出まなり慈悲藏がさまくと思撫りかしく孝行を慈と無情く言罵り杖ふり上げて打んとと老の力身お思はず踏くじいて片足

の駒下駄を飛そ折柄最前より門口は行みて内様子と伺つておりし景勝が透さき拾ひ取りお召物は候と恭しく越路の前に差出す越路とつくく見て賤しい婆々に履物を直されしは黄石公に杵を與へし張良が面影ハテと是より慈悲滅と奥へ逃遣り越路と景勝と二人の應對になり兄の横顔を召抱へたしと望まれ身代りの爲といふことと承知で奉公と許し固めの一品を受取て別れる迄○慈悲滅と前に評せし通り○母の越路は品格は好き拵へ萬端年頃お申分はなく随分骨折も見へたれども女ながらも山本勘助といふ亡夫は姓名を名乗っている女丈夫とは見へません△左様々々口跡といひ仕打といひドウ見ても濃茶に念佛抱火鉢で孫心かりあまやかしている結構人のお婆アさんと見へました○古人實川勇次郎(俳名鬼丈)が越路を勤めしかり道具方(詠へて黒塗の下駄を製へさせたので其趣意を尋ねたら尋常の駒下駄では母を大切にする慈悲滅の孝行の程が見へず又申家より引籠りながら常は襦袢と被っている位い行儀品格と崩さぬ男勝の越路も履物までも夫に準じなければ其人の見識を見せることと出来ぬ又景勝が取って捧げるよも黒塗の下駄でなければ見榮がせぬと言これ

△そふですが下駄のことで兎も角も此位い心を用ゐてそれを自然妙處に至るゝ相違は御坐らぬ△い御尤もく、此役心かりではオマヘン何役をつとめるにも此りありたいことく○東西々々下駄の評は大体にしておいて貰ひましやう下駄の長談議だの下駄の評言やそむに似たりなぞ、悪く謂れぬ内に○景勝と前も評せし通り中々落着て甘くやられまし△オット一本槍を入たいことがあるといふ外のことではない矢張り槍のことで景勝の槍の前も出た越名と同槍を遣ふのも仕方がないが大名お槍印と如何○夫より此處へ餌竿をかさげて歸つて来る横瀬母に泥足と洗せそのま、火達にもぐりこんで母に腰を揉ませが母と弟夫婦口から出任せの無理難題を言掛けトウ、寐て仕舞ふまで体格と好し言語へ好し調子と好し容貌と好し三拍子の上お今一ツ増して四拍子が揃っているも見る見物一統大受けく△ドロと謂つて申分とないが餘り調子の好いゝ任せて目見狂しいやと難と遣り過ぎられるので狂言を下お置するやうに見へますか今少し難と大事よ懸て仕て欲しいもの○此處へ峯松を抱へて入来る高阪の妻唐織子の恩愛を極にして慈悲滅と味方よつけん

言をつくし心をつくして慈悲藏との應對ト如何にし
て慈悲藏の承引せざるよりよんどころなく表へ立出
て裾の下ぐりを解て峰松を雪降かゝる庭の垣根に
く、りつけて下手へ這入るまで捨子場よりと余程見ど
さへがかりました○夫より慈悲藏と裏の藪へ筈と堀
と往んどなしお種の門口の我兒の側へ立寄んとすると
兩人附廻りの間骨折と受ましたが余り場當りが過て却
て眞情が薄く見へるやうだト慈悲藏と裏手へ這入ッ
て仕舞いお種獨舞臺に成つてより吾子の凍へ死んこと
を傷み戸を明ひとして最前良人慈悲藏が十切なる母の
一言が反古よなる故此寶戸の外へ一寸でも出るが否や
夫婦の縁も是切ぞト懸鏡とく、りおいさる腰下れ紐も
氣がつかぬるよも明られずトヤせんカクやと氣を揉ん
でいる際相憎次郎吉が目を覺し泣出すに驚き此子が憎
じやなければも我子に乳が呑したいと愁嘆け折しも又
降しきる白雪も耐かねてや外なる峯松が必死の泣聲も
思はず知らず轉び下り戸と叩き破つて吾子と抱上げそ
のま、肌もおしつけて前後不覺に泣涕こがれ此場の容
子を見せまして小陰を立出る唐織が信玄公を抱上げ乳
房とふくめ参らすからと慈悲藏と最早此方の味方夫に

えらせて悦ばせんとけ捨言語に始てハツト心附さいか
、とせんと迂路つく際は何處よりか打出懐劍に峰松が
肝先を貫れ再び吃驚コハ何事と呆れている處へ横張が
立出て治郎吉を引立奥の間へ驅入るわサテワ吾子と殺
せしは横張が所業義理も情もモウ是迄敵を取いで置ふ
かと吾子に死骸を小脇に抱込で奥へ驅入るまで先ッ申
分のなき出来△初日に之下駄其後之雷木で戸と叩き破
りましたが下駄とまだしも雷木を擔ぎ出すのは何んだ
か二輪加めへて悪い〜古人中村富十郎が勤たどりて
手首で後程叩いても破れないどころか、屹度思案して
脇で突て破去さか碎よわれよの念方にはづる、戸より
といふ淨瑠璃も合つてそふありそふあるものでありま
そ○中頃より紫琴が病氣で璃幸が種を勤ました年
若にしては中々うまくこなされた△この人は戸と
破そのに石臼と當てこわしたたが當人は余程新工夫の積
りかまらねども吾輩ともの見目ではいよく出てい
よ〜奇なりではなくッていよく出ていよく妙な
らずであります

○道具鑿ッて藪の場
慈悲藏の筈の有ふ様とあければも親と思ふ一ルン憐み

天より授ることもやど心に込てアチテ。コナテと堀試
るその際お白羽の鳩は数々飛出しを怪み最早入和諸鳥
時お歸る頃一羽はふせ二羽三羽と屹度あり今までの慈
悲お引替へ直江山城の助の本心をナラリと見せるど
ころ思ひの外の出來様子をトツクと親ひて顯れ出る兄
の横顔△いかに不敵の顔魂一物あり氣も見へまし
た○夫より傳習の一卷の取合ひ兄弟二人がね定りの大
立廻りよりト堀出せし箱と池へ取落せまでのところ
いづれも衣裳は華麗なり藝は達者あり暫時の間は目も
離されない程の面白サ實は花美々々△然し達者おまう
せて余りお芝居とやりすぎたので吾共はチツと不承
知でありました過たると猶及むざるか如しといふ古人
の訓誡もあれは今少し内端おしては如何△丸で二疋の
犬が雪の降ると喜びで往來を狂奔ふのをみてゐるや
うであつた△中にも花道で兄弟が雪と握ひで背中へ入
合をしく見せたのはドウいふ積りか定て例の場當とや
られる見込みだふがナト小見の遊戯じみて見惡ふ御
坐りました△是に限らば横顔は兎角茶利メイたことを
やられましたか婦女童蒙は喜ぶかも知れぬが見る人
が見たら何と言ひますか万人の賞より一人の笑ひとい

ふこともあれを御注意々々々道具元へ戻つて○兩人待
てと聲を掛つ、障子瓦落離と引明て立出る母の越路裏
口四方に氣を付よと慈悲彌を遂立遣りて横顔と差向ひ
よ成り横顔よと別て好い主取をさせると先刻景勝より
尋取りし無紋のト下白小袖と白木の臺よ載せ又九寸五
分を同く白木の三方お載て横顔の前よ直す横顔の之と
見て母者人此白小袖と何の爲と吃驚する是より先刻長
尾景勝が來りて其方と抱へんといふ言の端々ど景勝が
面体の其方お彷彿たるお依りサテハ巳の身代りお立ん
爲よ主従の縁を結ぶるふんど心よ察して態と母が承
引れいたれば潔ふ死でくれと語れを横顔といよく驚
き如何お主従るれをどてまた知行もくれぬ中お殺んど
いふ様な胸欲お主は持たぬと言張といつぞ 諏訪の森
よれたるて其方お命を助けしと今日用のよんといふ豫
ての智謀そのおなにか、ると知らずし、一旦思と請た
る上は是非よ及心ず且は此家の四面は景勝が人数にて
取巻きたれをどても通るとも逃られぬを迷ふ切腹せよ
夫が思なふを母が手に懸るかど追詰られ横顔は進退爰
よ谷り透と見て逃出んとする折しも彼時早し此時遊し
何處より誰人の打出せし手裏劍よや膝口おハツシと立

ツ是はと仰天引扱て見れば豫ておぼへのある小柄者お
て屹度なり心の中は覺語と極めて傍ら置たる腹切刀を
取るより早く右の眼にグツと突込み椽端ある手水鉢に
て血を洗ひサツ母の越路お向ひ日比無法の様子お引替
て威風凛々四筵を拂ひ景勝お似たによつて身代に立た
がる小面倒者此面から疵付て相好かへれをも身代の
益よと立まい今日只今父が苗氏と受繼山本勘助晴義軍
法興義と胸は貯へ三略の巻より大切此命といふ例の
言語が有つて夫より慈悲無の直江山城は助と叫出すま
での處△横瀬と前も許せし如く達者おおゐて此上
なし△膝頭お手裏劔と撃込れ吃驚して引扱いて白布よ
て疵口を結ぶところア、痛い／＼と度々謂られるが何
だか女しいやうで茶利が、ツて見悪く聞悪く五坐りま
した又眼を突さながらモヤツぱり痛い／＼を言はれま
したか天下の豪傑とも謂られる人物が覺悟の上で目と
突くの痛いと申しましたしやうかモン腹でも切るのであ
つたらオィ／＼と泣出しましたしやう△オット僕も少し
謂もせて項戴目と突てから椽端の手水鉢へ血と洗ひよ
もき柄杓で氷と突き粹破し摺ひで收捌きどころ寒い景
色と見える細の仕打は受ました氷と一塊掴み出して

半分食て捨たのこドゥいふ積か膝頭も手裏劔と打れ自
分に眼と突さ雙方の傷みで息切がせるから喉をしめす
といふ思入かそんな氷を食ふより柄杓で水を汲で飲
む方が余程早いコンナ危急な場合お水ムシヤ／＼は不
承知／＼是も矢張場當りが過は仕ませんか△越路と
相變らず平々淡々凡／＼で評せるどころもなし○此處へ
出て来る直江山城の助種綱今迄の慈悲無とはうつて變
りし長上下の優美の行粧にて兄勘助お向ひて具身の履
歴を語り眼と穿つて身と全する大又夫の魂と賞嘆し
吾主長尾謙信に仕へよと勸るところ前の慈悲無と皮
相むかりでなく内心まで替つたやうな見へ離分貫目も
あつたが前も言つた通り何分男の好いのと作りの若
いので智勇兼備の軍師お少しいかゞと見受け申し
たり△達者は任せて突込でくる勘助と強て争はず軽く
受てサラリとやられたところ中々手際を毛れ○夫よ
り勘助は謙信如きもの、家々もみならずと言放し此勘助
が主人と仰くは足利十三代の公達松壽君九郎と次郎吉
と抱え高阪の妻唐織を呼出し坐敷の真中へドツカと面
り△お邪魔ながらチヨツと謂としておくれ此處で提燈
草益お腰とかけられたがドコヤラの評判にもある通

り小細工過て悪い〇東西〳〵是より衣裳を引脱て
 眞山本勘助は成濟し浮留里に合して乘りなり先年室
 町の館まで足利家の夫八膳の方を奪取て立退きことよ
 り戸田信玄不知れて主仙の契約とあしたること賤の方
 は病死のこと若君を治郎吉名け吾子よ見せて養ひ置
 きしことまで一五七十五物語り夫より雪中の筭是に
 ありと先刻土中より掘出したる箱と取出して蓋と掛開
 け一流の旗を取出し庭前の竹と切て之を掲げ椽端小押
 立勇威と見せるまでの處〇身体の廻轉といひ言語の言
 廻しといひ調子おこまつて甘いもの〳〵△成程調子は
 如何にも好つたがドコヤラがさ〳〵してゐて只々横瀬
 が山本勘助と名を替たといふばかりでドウモ人物は同
 じ人物らしくホンの武勇一通りの男で武田信玄に懸れ
 て哀へた足利の家と再興すべき智勇兼備の英雄と十分
 お見へなかつたのは誠に残念〳〵今少し工夫して遣ッ
 て貰ひたふ御坐りました△左様〳〵横瀬の際と勘助お
 成ッてからとでは横瀬の時の方が余程の〳〵出来〇玄か
 しながら舞臺一杯にやられ〳〵の感心〳〵△コンナこ
 とはドウでもといへど請ふやうなモノ、序でだから一
 つと申ておさまを勘助が箱の中かゝ取出と白旗の紋と

武田菱でしたがアレハニツ引龍に玄なけれを源家正統
 武將の白旗といふ文句も合ひますまい△ソレは箱を明
 る時にからけてあつた繩を小川で切解いたが長い同埋
 てあつたにしてはよく繩が満足でゐたもの昔しの物と
 繩まで強かつたと見へる〇オット東西〳〵夫より幕切
 まで何も上出来見物一統大受け〳〵

〇四幕目役人替名

- | | |
|--------|---------|
| 武田 勝頼 | 中村 飛鶴 |
| こゝ元 濡衣 | 嵐 璃幸 |
| 原 小文治 | 嵐 笑之助 |
| 白須賀 六郎 | 市川 市三郎 |
| 長尾 謙信 | 中村 傳五郎 |
| こし 元 | 市川 勝三郎 |
| 同 | 中村 千代 |
| 長尾 景勝 | 嵐 橋利之助 |
| 關 兵衛 | 大谷 隼左工門 |
| 八重垣 姫 | 嵐 橋三郎 |

〇謙信館の場

板附の腰元二人濡衣共都合三人居並びお定り此言語れ
 りかゝ出にゐる花作の眞作二人の腰元はその男振見

どれいやみたつぶりの言詰めつて打退て奥に這入る跡
は濡衣と装作の差向ひ装作は當館の主入謙信が一子景
勝と討ても出さず刺へ義晴公の志願松壽君御母公諸
共今日此館に招く段心得難く思ひし故菊作と成て入込
し次第を明し濡衣と今日の響應とあつて法性の兜と奥
れ上段に飾つてあれをけふをすさず盗み取るといふ
互の秘密を明し合つてゐる處へ濡衣の父花守關兵衛出
來り兩人と驚し装作を勝手へ逐遣り濡衣關兵衛兩人
かさみ替り身れ上話の最中お成りツ一の騒ぎに吃驚
り兩人奥と口へと別れて這入るまで○装作と花耻かし
さ角頼ひといふ情留里の文句の通り奇麗く然し奇麗
計りではなくドコヤラ權があつて只の花作りとも見へ
ず好つたく△濡衣と密談の間濡衣かいかよも若くツ
て奇麗もゑいづれ劣々ぬ梅柳丁度似合の年恰好で然
色の出合と見へました○濡衣と前も言つた通り奇麗と
天眞だがナト作りが若すぎたやうだ○關兵衛と只の老
爺一併あるべきと思これ老○夫より爺の主謙信松壽
君御母公の迎へ出る景勝來つて奥方の上意と稱し吾と
我首を打んことを謙信に迫り終つて自殺せんとする折柄
花守關兵衛白菊の花を携へ出來り花を替へて身替り

進め装作を呼出と謙信装作を勝頼と知つてわざと家來
お召抱へ上使へ暫くの由縁を願ふ是より景勝と堀尻へ
と出で行き勝頼と衣服と改めよとて次へ行は是より謙
信は装作を勝頼と見認し關兵衛の器重を賞し種ヶ島の
鉄砲と預るまでれ處○謙信別に評する程の事もあし△
景勝も同断△此人よしてマツ大体△關兵衛と前も言
つた通り只れ老爺○装作は空をばけた様子チヨツとや
くれました○道具廻る

○道具替て十種香の場

行水の流と人れといふ例の文句よつて前の花作の姿
よ引替へ長上下の優美の行粧めて悠々として一間を立
出る装作の勝頼左の方の一間よ之館の娘八重垣姫が床
に繪姿かけまくもれん経讀誦のリンれ音亡夫したふ悲
嘆れ十種香右の方の一間にはこなたも同玄松虫の鳴音
に袖も濡衣か良人を吊ふ慈嘆の稱名彼を憐み此を悲み
坐よ涙よくれるところ○瀧酒とし仕打如何も大名
の若殿様と見へました○後よしよんばり立出る濡衣装
作が變りし姿に驚き衣紋付な上下の召様まで似と
と愚矢張それまゝと暫時見とれて私シヤ輪廻迷たそ
ふなと思はず其處へ伏沈むところ情といひ愁いと

感心よく好く出来ました○この泣聲を漏れて八重垣姫は
襖の間よりソツと窺ひ一度と装作の容貌の勝頼も彷彿
るに驚きしが正しうお果あされた物似たと思ふと心の
迷ひ繪像の手前も耻し立戻つて手と合せ又戀しさよ
耐かねて立ッ居ッ繪姿と装作と見くらべる程生寫よ
似てゐる處より思はず一ト間を走出て装作も取替るま
での處○おぼこい仕打々々○是より装作に勝頼とい覺
へるしれ鹿相あるなど突放され装作と濡衣の二人のそ
の中を忍ぶ戀路といふやうなかはいらしい中かど疑ひ
左もなく心押附るが媒を頼むと恥らしき思入れ取
持いゝすまい物でもないが眞實底から装作殿御執心
でござりますかど濡衣も問れて猶も顔を赤らめ勤する
身はいざ知らず姫ごぜのあられもないと文句に合して
の身のこゑ○情があつて好つた〜カスガ伊丹屋の
隊長〜夫よりその詞に相違なく誓紙の證據に証
訪法性の兜を盗で貰ひたいと濡衣は言ふソレと了りサ
テは彼方と勝頼様といふ口と疎忽心しのたまふなど装
作も押へられその顔とつれ〜と打守り言掛け斗りに
て枕かはさぬ妹春中ね包あるは無理なかねど同じ羽色
の鳥翅といふ淨留里も合せて扇を持つて歩さながらの

容体○大名の姫さまに之ヲ出来そぎた仕打△ナト
どころか大出来すぎアレデ相方お鉦を入れ丸で田舎
の婆アさんが天王寺でやらかす念佛踊だ○オツト東西
〜△古人は誰やらが(名を忘れたが)此役を勤たれり
と始終袖かた手首を出したことを無つた私祖父の
一ツ話であつたがその位の内端でなければ大名は姫
様とて見へません○夫より装作に突取られモウ是まで
と装作の指添お手とかけ自害せんとするよふ濡衣
はそれ志と感入り装作と勝頼なることを明しけれも
又愧しさも一入よて始れ恨の百分一も得いはず聞へま
せぬと心かりにて勝頼と濡衣なるまでの處の勝頼と始
終八重垣姫も見劣りなく大出来〜と姿色といひ沈着
といひ情愛といひ優美の内に威谷のあるところ感服
〜マツ此役が一日に大當り〜此人は近來一芝居ご
とよ役者の上達するには實に驚き入開たこの勢でいよ
〜勉強されたら瞬息間大立物もあることは印紙を
張つて保證します△しかし余り男が好いから女難の程
が思ひやられませす誰やら様は病身にあらぬやうな
精々豫防法に注意が第一(向ダカ此ういふと虎刺列の
やうだ)前車の轉復と後車の誠といひますかお恐る

べし慎むべしさホイ大きわれ世話○濡衣襲作と八重垣
姫の間を彼是ど取合す仕打中々々やらくやられまへした大
太夫は既足く△何分年の若いのと顔の美しいの、チ
ポコッって愛敬のあるところへ作りが若くれ負に金爛
の帯と来ているので八重垣姫よりは却つて愛らしく處
を以つて八重垣姫が割にすこし老ている方もる
ドウも襲作が八重垣姫より濡衣の方に氣がありそふに
見へて見物一同余計な氣を揉みました○八重垣姫サス
ガ當時賣出し伊丹屋大先生丈あつて又格別おもれハ
然し前にも許しましたが上手に任せて十分お情愛を見
せずたので少し厚かましくなり大名の姫ごせにはナ
ットあふれもあいやうお拙者と存じましたか諸看客さ
如何○是より謙信の出るあり襲作を搦尻へ追遣るこれ
處へ出になり謙信の言附を受て勝頼と打取の追手お向
ふ白須賀六郎原小文治○兩人共若手のこともる華麗く
△舞臺とかがく達者にやられます折角勉強が肝心
今が修行のマツ盛り○サテ是より謙信八重垣姫を罵り
濡衣と引立て奥へ這入るまで別段評する處もあし道具
廻る
○道具替つて奥庭狐火の場

思ひよやこがれてもる野邊の狐火の琴歌も連て出よ
なる八重垣姫始終人形の身振りいろくありてト此
上頼ハ神佛と床に祭りし法性の兜を取て押載さ庭の溜
の泉水お移る怪しさ姿は驚き再び兜と捧て泉水に吾影
を移しスツと立って詠入るところ○スエカッタく
夫より引込みまでの處○定て目覺しむこともあるべし
と樂みしおト通りおせられしは残念く、單笑の病氣
よて急お代理をせしことも別段趣向もあかつたど見
へす△人形振の手の遣ひ方と裾の運びは好ツたが頭
が思ふやうな動かさ始終うつむき過て上等の人形遣ひ
が遣ふ人形とて見へませるんだ又人形遣ひも丸の素人
と見へて始に邪魔にゐるむかりアレデハ人形遣ひでと
なくつて人形遣ハれでありました此前東京で澤村田の
助か此役々勤たあり矢張り人形身でやりましたか其時
は東京第一等の人形遣ひ西川伊三郎を雇つて振をつけ
て貫ひ又遣人もやつて貫つたと聞いていまどが今度もそ
の格で吉田某とかいふ上手の人形遣ひと雇つたお好ツ
たふふ惜いことでありました○何ハトもあれ棧敷よ
りも土間よりも鉛の代りの銀だくと聲の掛つたのは
お手柄々々々○夫より道三最後の六詰謙信景勝一統小

御苦勞

○中狂言役人替名

土屋内記	中村飛鶴
民谷坊太郎	嵐橋市
こし元玄のふ	市川家幸
門弟十藏	實川若太郎
同 數馬	嵐橋治
伴僧眞來	中村珊瑚郎
同 頓穴	嵐橋利之助
森口源太左衛門	市川市十郎
伴僧西念	中村傳五郎
同 雲鏡	中山文五郎
門弟官藏	實川松五郎
同	阪東喜多六
志渡寺方丈	大谷龍左衛門
妻 菅ノ谷	中村紫琴
乳母お辻	嵐橋三郎

○花上野譽崎志渡寺の場

○幕明と伴僧四人の出お定りの捨言語あつて上手へ這入る○何も御苦勞く△イヨ大歌舞伎く○此處へ兩

人の門弟と十藏數馬と連て出なる森口源太左衛門先
 年民谷源八が横死のことより今日梶谷内記と立合のこ
 と又元は内記の門人よて新に自分方又入門せし十藏數
 馬と内記が臆病なる毒酒を呑せる手段と示し合ひ方
 丈へ通るまでの處○此役は此人は適當にて一日中の大
 出来く人骨柄言語沈着まで大名の師範とも勤る一
 藝は達人わて然も強惡不敵の人物と十分に見へました
 △例は五分月代で惡と表し見せるこしらへでそが一家
 中の師範ともいされる人が浪人け惡漢じみて不都合と
 いふ思入が今度はそりへがしの大番で一ト通り武骨の
 こしらへ只仕打と言語廻して惡と利せられたのは取譯
 わ手柄へ然シ花道から本舞臺あかり上手へ這入るま
 では何も來やれくト三度いつたがあれとチツと五月
 蠅た○夫より梶谷内記出にあり出迎これし當院の方丈
 と挨拶は問森口武藝を賞め民谷が横死を惜み坊太郎
 が業病を嘆き乳母お辻が辛苦を憐む容子○シツクリと
 して好ツたく△惜哉粧飾がすこし若過たり○方丈は
 ドコヤラの評も毎度のお勤めも申分なしとありまし
 たが毎度のね勤めか知らねども社員目で見たとこ
 ろでは威もなく徳もあつく大寺の方丈はさてとき役僧と

いふのもむつかしくホンのデモ坊主の年を取ったので
堂守の老僧とよりしか見へませあんだ△ソナ評はド
ウでも好いとして跡と早く〇オット承知夫より内
記の妻管の谷上手より出ななり其人内記の禮酒を差る
内記は例年の式禮イヤ頂戴いささん！恭しく塵手水し
て土器と取上げ管谷に御酒をつがせて已に飲んどせる
時先刻より上手の障子の影は源太左衛門が此場の様子
と伺つてゐる内記一寸これは目を付け思入あつてグッ
と土器と乾そが否や顔色伊は變つてガタ／＼震ひどる
ることなほ潜れし源太左衛門は此場の様子を見届てバ
ツタリと障子を片切る方丈と管の谷ハ内記が此体は驚
き持病にても起りしかと心配して容体と尋ねる内記は
ハテ心得ぬ今呑干したる瓶子の酒を通過れば五体ふし
み必苦しき此有様若毒酒イヤ定めて毒虫でも入つらん
云々の言語あつて女房管の谷は肩あらずがつて客殿へ這
入る迄の處〇内記は随分落着てやられたれども毒酒を
呑で俄お苦む工合余り急率過ていかよも態とするやう
に見へて悪し素より障子は影は源太左衛門が容子と親
つてゐることと承知でとる苦惱もゑ猶更心と用ゐて眞
實らしく仕なければなりませまい今少し仕打がありそ

ふなものの〇方丈の前にも評せし通り無論々々〇管の谷
さしてのこともなかつたがマツ大体〇夫より前の四人
の伴僧は引立られて出になる乳母は辻散々打擲され
必死の處へ坊太郎かけいでしきり手真似をして同宿
共へ託れども情愛通せずいよ／＼手荒なこととなすよ
りお辻と終に其場まで目と廻す坊太郎のまそ／＼悲しみ
て同宿へそがれども介抱もしてくれねば自身に袂へ水
を含せて來り飲それども尙蘇生せざるより一層の工夫
を廻し傍にありし鏡鉢を持出した辻の耳の端で叩て呼
活を是にて氣がつきオ、和子に身に怪我とあかつた
ひと吾身のことの忘れて坊太郎を引寄せ嬉し泣にゑく
同宿共は蘇生したのを見て方丈の前へ引づつてゆくど
又も立掛る折柄内記の妻管の谷立出た辻を救ひ四人の
同宿を逐遣りた辻の志操を感じて不便がる辻と主人
民谷の横死と悲み且は坊太郎の業病を嘆き和子の病ひ
を直したさに食を絶てると巳が病ひの次第を物語る
夫より管の谷の指圖に睨ひ坊太郎に助けられて部屋へ
ゆくまでの處〇乳母お辻四人の同宿に引出され打擲さ
る、開始終絶食れ病体にて疲勞せし様子うまかつた
く夫より管の谷と物語の間も情愛余り有つて申分る

し△衣裳の好みの受まいたが白粉が濃抹ゆるドウも少
し若く見へ同宿に打擲されて目を廻せるところも何とや
ら色氣があつて病ひの疲れでいふく持病の瘡でも起つ
たやうに見へました淨留理の文句にも今の老木の乳母
れ辻とあるから今少し老婆の作りには仕方が然るべ
しかね△夫に水晶の珠數を手を掛てゐたが後室様とで
もいひそふで何だの色氣が有り且の前に入重垣姫の折
も同じ珠數であつたから少々と木の珠數に仕方が宜
つたやう（假令今も零落ても昔は民谷家の乳母ゆる水
品の珠位は持つてゐるにもせよ）○東西よく○菅は
谷これ辻と物語の間、或は憐み成は願とどころシツッ
リとし仕打名にし負ふ民谷の妹樋谷は妻と確に見へ
升た○坊太郎といふにも年のいかあいで藝に味ひこ
あかつたが自然に頑足のあいつ打が却つて眞も迫り求
め進んで見物の袖を濕したると奇妙○夫より菅の谷獨
舞臺とあり草葉の陰の兄さんがサツ悦んでござんしや
ろとお辻の志を感じての想嘆の折柄良人内記が源太
左衛門と立合ひ不覺を取りし腰元の注進を聞いて口惜が
るまでの間○こたへましたく○夫より内記源太左衛
門方丈弟子共残らず出に成り源太左衛門の仕合に打勝

しを鼻に懸けいよく、暴威を振ひ内記と自己の交際に
意恨の残らぬやうと印の盃を勧められ酌に立し坊太
郎の民谷源八が遺れ子といふことを知りて底意を含み
杯と差出た坊太郎も夫と知りてや酌をなさ、るよりそ
の無禮を幸ひとして非道の折檻を加へる折悪くも坊太
郎の袂より桃のころげいでしかむ殿へ献上の桃と盗み
しど口實を構へていよく圖に乗り刀と抜て内記を威
し飽まで坊太郎を責め罵り菅の谷が言譯をも聞入あく
終に椽より庭へ蹶落を斯と見るより乳母れ辻か驛出で
坊太郎を介抱し頻りにそれ罪を詫入る源太左衛門の其
言をも聞入ざるのみならず却てれ辻を嘲弄し己に坊太
郎を手撃にせんとせしが方丈の理論に説伏せられ詮方
あさに口より出任せれ廣言を吐散し門弟を引連て立歸
る迄の處それより菅の谷の良人内記を介抱し方丈共々
客殿へ這へるまでの處○源太左衛門の此間も亦大出来
々々々△内記夫婦に飽まで悪口を容子憎かつたく
○内記の森口の振刀を見てガタ／＼震ひにゐる臆病の
様子は程にと參るまいと思つてゐましたが存外の大出
來△然しまだドコヤラれ若いところが見へました△オ
ットれ若いところのあるのが花井此ういふ役をして申

分のあく出来るやうなあれを最早老込みく〇夫より
れ辻の獨藝坊太郎を執へての長愁嘆瀧に打れるどころ
より終に情に迫って自殺するまで〇前にも評せし通り
爺御が此世にござるゐるゐるの振も余り動き過ぎ始絶食
疲勞の思入れうまいものくへた辻く〇是より内記管
判も無理ありませんイヨれ手柄く〇是より内記管
の谷出に成り坊太郎が作病をれ辻に告げ十藏數馬を呼
出して仕合をさせ坊太郎が武術の程を見せてれ辻を喜
ませ幕と切るまで何も出来ましたく〇是より切狂言の
評言始り左様

〇切狂言時得千引綱船序幕役人替名

女良	ね杉	中村	紫琴
れ坊	吉三郎	中村	珊瑚郎
手代	與四郎	嵐	笑三郎
けいし	やね三	中村	千代
茶屋女	ねまげ	市川	勝三郎
同	れてう	嵐	三治
若イ者	喜助	同	新吉
同	新吉	嵐	橘太郎
麻布	金太	坂東	喜多六
綱打	七五郎	中村	傳五郎

〇品川驛島崎屋の場

幕明くと島崎屋の見世先若者新吉帳場格子の内にて大
帳を調べてゐる△帳場様素人屋の様で悪かつた處
へ藝者のれ三箱廻しの若者を連れて出になるへた三と粧
飾が上品そぎて驛場の内藝者どい見へず〇其跡より御
家人金太郎楊枝と頭に挿し濕手拭を手に提げ湯上りの
思入れにて出にありへ是は又粧師が下品そぎた〇兩人
いろくの言語ありて本舞臺へ掛り金太と新吉と兩人
れ三を駈つてゐる茶屋女おしげれ三を呼に來るれしげ
に連立つてお三新吉二人ながら奥へ這入る金太は獨り
茫然と上り口へ腰を掛て表と詠て居る處へ綱打の七五
郎通り掛る〇七五郎れ作りが五ツ六ツ若過ぎました〇
金太と七五良を見認て呼戻した坊の吉の助と居續とし
てゐることを話そ此時吉の助暖簾口より出て來り七五
良も久しぶりだから此處へ一處泊つて話して行けと
いふ七五良と今夜と是非歸るといふソツナラ暮方まで
飲で行け飲で行ふといふ相談に成り七五良と不圖吉の
助の以前の身分を思ひ出し「人といふものと替り安い
ものでね前さんも其以前と將軍家の御近衛川軍十良
さまの弟ト御吉の助さまともいわれる人が身せふが惡

いばつかりでた坊といふ仇名も呼れ今で若手の悪顔
仲間と「思はず嘆息する」又そんなこといひ出してふさ
がせるせ」と吉の助お謂はれ「是は見世先で野暮を言出
しヤシタわたしもチツトだが、緩み升たかね」といふ
處○手軽くッて好し夫よりなにしろ呑ながら咄とど仕
やうと(金吉七)三人共奥へ這入る流行歌浪の音よて道
具廻る

○道具替り同女郎部家の場

○酒屋の手代與四郎以前の藝者ね三茶屋女おしげ若者
喜助揚新造たさくを相手に酒を飲でゐる處へ以前の若
者新吉茶屋女おてりと白丁の徳利をもつて來る取巻一
同それくのねかしみあり與四郎の相方お杉が出て來
やうの遅いのを待兼て若者新吉が一寸見て参り升ふと
立上る折柄上手の障子を明てお杉出て來り與四郎に向
ひ今日の引ケまでと歸さぬといふ與四郎はいつもあら
ば好けれども今日と得意場の掛廻りもゑ落附てゐるら
れぬ是非早く歸らねをあらぬといふ夫より互にいやみ
の言語あつてお杉少しふさぐ與四郎も思入あつてお杉
と慰めるお杉はいよくじれるこゝし取巻一同顔見合
せ夫々捨言詰あつて下手へ這入る是より相方にありお

杉といよく塞でゐる與四郎は夫を氣にして尋ねるお
杉と紋日節句の内證の苦とれまけにね袋の長煩ひで金
が入り追々借金が殖て難澁とるとサモ悲しそふお身の
上を話々遠廻しは無心と言ふ與四郎は眞に受て氣の毒
がり差當り幾程あれ心問ふ合ふと金高を尋ね二三十兩
あればドウか操廻しが附と謂はれ其位のことなとドウ
か仕てやらふ調度爰も七十兩拂と取つた金があるが相
憎今日は勘定日で旦那へ納めねと勘定が立ぬから今日
はやれぬが此次の晦日まではドウかしてやるから狭
氣と出さざるは是で今日の凌ぎをしると懐中より金財
布を出し此時上手より以前の網打七五郎始終と伺ひ居
り思入あつて障子とゞる與四郎之是を知紙入の内よ
り金と三兩出してお杉より直に歸るといふお杉はお
歸りなら一寸髪をど撫附てゐる處へ以前に取巻出て來
り一寸と言語あり與四郎之忙しいので氣が揉る大ッウ
晩くおつたと立上り若者新吉がね駕をといふと斷り今
夜之月があるから高輪の鷹木から乗合で歸るつもりと
お杉を始め其余の者に送られて花道を向へ這入引續て
上手より以前の七五郎吉の助金太出て來り夫々言語あ
りて七五郎も亦金太が進る駕を斷り鷹木から乗合とや

らかし升と與四郎の跡と追掛るといふ思入にて早足に
向ふへ這入るまでの處○お杉は藝の仕打とマツとして
おるて衣裳の好みもわるゝ髦も大き過ぎて極不意氣○手
代の與四郎と卜店の番頭適任々々お杉の身の上話を聞
てサモ氣の毒といふ思入にて金と出てやる鼻下長のあ
ん心い大出来々々△與四郎早替りの吉の助は随分意
氣と傳法風にやられまゝたがドコヤラなまたれてお旗
下の蕩樂者白無垢デッカとオット○オット此役と飛鶴
の代で元より此人は無理な役評者の目から見たと
ころで思つたよりと上出来の分○七五郎は障子の障
で與四郎が所持せし七十両小目をつけての思入より引込
までサラリとやられて好いと言ひたいが余りサラリす
ぎました△ドコヤラの評判記おは七五郎の衣裳の好と
賞てあつたが小弁慶の衣裳は如何當今の流行に當たつ
もりか知りませんが此衣裳は發端から大切まで引合よ
出る衣裳だから矢張り此前東京で龜藏が仕た時れやう
にモツと荒い弁慶編に仕た方が宜からふ○是より吉の
助と杉の情話木の頭まで別と評する程のこともなし
○道具替つて永代向河岸の場

○高輪の乗合船河岸へ附く乗合の仕出し思ひくけ形
よて船より上り鎧々捨言語あつて上手へ這入る此内七
五郎と風呂敷を肩に掛け笠と持て船より上り足早と上
手へ行にかゝる跡より續て與四郎と結目の解た風呂敷
包を抱へ自墮落形にて遠て、船より上り七五郎を追
かける舟は元の戸家口へといふ(與四郎)「モシ〜ア
ナタ一寸待て下さりませ(七五郎)わしがどこかへ「左
やうでムリ升る「何ソツ用があるかねとト是より相方
よ成り與四郎と一杯機嫌でツイとろ〜とやつた内財
布の中へ入てゐた七十両の金が見へなくなつたから
異変ことを申さ様だが私が傍へムつたればお前様斗り
モシひよつと包の内へでも紛れ込みとせぬか實おれ
氣の毒ながら念をらしよ一寸改めさせてくれといふ此
内七五郎と懐の内より金を出し笠當れ間へ隠と○チ
ヨツと笠を振つて見る仕打細い〜○七五郎は屹度と
なりわしがお前の傍へゐたも其金を盗んだと言ひ
なさるのか外の者を追上げておれを目ざしていふからは
なれも世間へ顔が立ね〜から存分に改めね〜と風呂敷
は元より丸襟に成つて見せる與四郎は風呂敷より着物
まで一々振つていろ〜探せども金のあいで不思議

といふこゝろあしあつて鹿相を申かけ眞平御免とあやまる
七五郎は疑は晴たかど念を押そ與四郎と疑念とムリ
升せぬも了簡して頼む此内七五郎と着物を着「ナ
ンだ了簡しろとオイ人盗人の悪名とつけて了簡しろ
で濟ものカイとこれ馬の骨か知らねへがごまうしてい
たぶりかけたれが金でも持つてゐたらぶつたくる仕事
ダナ己ぬがやうあ太いやつはこの以後の見せしめだト
有合ふ薪さつばと取て「いひかけぬかした青二才此薪
さつばの節瘤で打さるぐるが腹いせだト散々に打据る
○打いた跡で腕が痛いといふ思入れ手と振り肩と叩く
仕打請ましたく○與四郎と自由不成って打れ御存分
にゐされたら彼方のお心も濟ふ程おモウ了簡してと詫
る七五郎と尙も圖に乗り打ち殺してキ好い奴だが命を
取るも殺生だから是で了簡してやると傍ある石で與
四郎の額をたたくか打つ與四郎は眉間と押へ掌の血を
見てモシ此儘お息たへたらいわづと知たこゝろは解死
人と急度とある七五郎は鼻であしらいもそりがたりを
殺したとて何の祟りがあるものか此泥脚で斯ふしてや
るト笠と持立上つて與四郎を蹶倒せ○憎かつたく○
此時笠當の内より金包がハツタリ落る與四郎は取上

ゲ「コリヤ是金七五郎連れて引たくりエ、出シヤアが
れト金を懐ろへ入れながら行か、る與四郎足もとがり
留る夫より泥坊ダく」と上手より町人仕出し大勢出て
バタ／＼とあるト、與四郎は七五郎の單物の片袖を引
ちぎつて後ろへ倒れる七五郎と其儘向へ逃て這入る是
まで幕○七五郎はサラリとしてゐる内よ十分惡味があ
つて此人にして此役あり○與四郎と始終店者の温當の
仕打申分るし△七五郎の片袖と手に持ちむかると急度
見て口惜しい思入れ何んの因果で此様な情けない目よ
ト立上り体の痛いといふこゝろなしてドツと下に居り「
逢ふことじやナアの幕切出来まし」

○評者因にいふ此狂言の河竹新七翁の新作にて元の名
題と網模様燈籠の菊桐といふ即ち燈籠にるき玉菊のく
る夜かると正徳年中全盛の聞へ高かりし彼れ江戸新吉
原中万字屋れ抱へなる遊女玉菊れ追善の意を含み玉菊
と稻木新の丞のこと、小猿七の助のこと、を合併にし
て脚色と立今より二十三年れ其昔し江戸猿若町三丁目
河原崎座の盆替り芝居と初て興行るし役人替名は小猿
七の助日吉丸故人(市川小團治)網打七五郎蜂須賀小六
庵主西念故人(坂東龜藏)稻木新の丞○手代與四郎故人(

坂東彦三郎(れ坊の吉三)所化教心(河原崎権十郎)今の市川團十郎(菊川玉菊故人(尾上菊五郎俳名梅幸)看かの野屋儀兵衛(故人浅尾與六)七五郎如おるみ(市村羽左衛門今の尾上菊五郎)若黨助平(大村村右衛門)ゑどにてありしト「評者はまた其時分の産れたまかりのオギヤ〜でお袋の乳心かり甜ッてれり中々芝居を見る段ではありませんから右に記せし云々もホンの人の脚に聞しまはなれを自然間道ひしどころもあるなるべし諸君子そのお積りで)夫を這回は玉菊新の垂の脚色を略き小猿七の助けことむかりを見せたるものあり且て前にも云し通り盆狂言を一月狂言に見せたるものあれを衣裳道具立萬端不都合の處も往々あれども是はよんところみさことあれをトヤカウいふと無理と知るべし以上は大人方の言はずとも御承知のことあるべけれども婦女童幼の爲も一寸た話し申しておきますイヨとんだ昔話で御退屈サマ直に次の幕の評言お取り掛りませう

○二幕目役人替名

- | | |
|-------|-------|
| 奥女中菊川 | 中村飛鶴 |
| 手代四郎 | 中村珊瑚郎 |
| 下部可内 | 市川瀧助 |

- | | |
|-------|--------|
| 青森 繁藏 | 實川 若太郎 |
| 大井喜太郎 | 中村 嘉吉 |
| 鉄市鉄太郎 | 嵐 笑三郎 |
| 大丑沼太郎 | 嵐 橘治 |
| 小作 八藏 | 尾上 當見治 |
| 蜂須賀小六 | 市川 市十郎 |
| 落合 橋藏 | 嵐 橘太郎 |
| 手立 毛藏 | 嵐 笑之助 |
| 筋尾 勇藏 | 市川 龍五郎 |
| 瘦淵 白藏 | 坂東 喜多六 |
| 蟹江 穴丸 | 嵐 橘利之助 |
| 横目 助平 | 中山 文五郎 |
| 小猿七之助 | 嵐 橘三郎 |
| 日吉丸 | |

○矢矧の橋の場

○若者三人出おなり日吉丸れ噂さ捨言語にて幕の引附へ這入る知せに附き正面の淺黄幕と切て落す臺のこし々へ総て厩崎猪の入口矢矧の橋の景色橋のたがと持ち伊参の犬を連れて出にる日吉丸○如何にも子供らしき粧飾にて形容も小サく見へまし△チト華美すぎて命時摸擬だといふ評もあつたれども夢の場も華美

る方が却って役者の腹で五坐りましやう○花道の中程にて犬を相手に一寸立廻りあり夫より本舞臺に懸り橋の上お掛てありし詠への繩を橋の上へ廣げ大の字形よ寝る△チヨツとお邪魔るか橋詰の高札の文句も切支丹三々の文句がありましたが足利時代には如何○此處へ野武士の棟梁蜂須賀小六大勢の手下と逃れて出て來り誤って日吉丸の足と踏む○蜂須賀は大丘といひ容貌といひ立派々々△是も粧飾が仰山そぎて丸で熊坂長範強盗の頭と見へるが野武士棟梁に之ナト下品の様に思はれまを然し夢の場だから是も役者の腹か○日吉丸起上って小六の裾とどろへてのび久伸とし「お前方のやうな禮儀を知らぬ人達は通をことはならぬと小六は鎗の柄とどつて書面の見得にゐるところ○イロ大舞臺々々々と賞めたいところだがマツ大体○是より相方おあり小六と日吉丸と段々の問答小六と日吉丸に今宵の大勢の徒黨を連れてドコへ行くと問はれ「今日日本六十九州に天下を望む者多く」と其身は大望を告げ敵地の様子を探るため岡崎へ趣くと物語り○蜂須賀はシツクリとして中々大きくやられました○日吉丸と其身の素生と明し小六の意見に随ひ味方につく○日吉丸蜂須賀

の手下一同に向ひ「かわもがつて下されやと手と突て頼むところサエが子供だけ蓮葉の内よ可愛氣な様子のある仕打受けましたく〇サテ日吉丸は今宵意恨のある岡崎宿の代官方へ亂入するといふ小六の話と聞き已も意恨のある家も案内とすると小六の尋ねも随つて家内の容子を物語る若又敵にも用意あつて前後左右と取圍ふ其時如何するぞ大勢の手下打つてかゝり暫く立廻りあり終に大勢は手下を足下と踏へて山の大將おれ一人とキツト見得になるところ○華美く〇此内蜂須賀始終思入あり日吉丸の働を感じ詠への槍を取つて自身も手を下し是より兩人の立廻り○熊阪と橋弁慶を合併にしたやうで面白いことでありました○蜂須賀は日吉丸の眼中より光を放つに驚き槍と放捨て好さ味方と得たると喜び最早時刻も丑満とさ岡崎宿へ案内致せ(小六)「イッフレ小冠者(日吉丸)「合點ダ」の言詰あつて日吉丸キツト見得フツテ向へ這入る小六その跡を見送りニツタリと思入あり「ハテいさましいわつばだナアと續いてフツテ向ふへ這入る手下一同もつくりと一人々々向へ這入る鳴物打上げドロく成り道具替る

○道具替って永代橋の場

○総て永代橋の東の方佐賀町川岸を見たる遠見の景色
今までありし下手の高札場と被蓋張の講釋場と變り矢
矧の橋は永代橋とある本釣鐘誂への相方よて講釋場の
床几の上に寝てたりし日吉丸早替りの小猿七の助目を
覺しのびを仕ながら「ア、そんなら今のは夢であつた
か吞附ねへ焼酎でぐつそり酔てせつあいからチツト酔
の醒る内と烟草盆を枕にして矢矧の橋の讀切と二くさ
り間内にいづの間にか寐て仕舞い夢に見たのと講釋で
聞か通りの矢矧の橋ある程知らねへ事ハ夢にやア見ね
へものだ又考へて見るとおかしのは矢矧ハ似寄れ永
代橋トツチリトンの文句にもある通り親は筑阿彌彌助
といふ漁師ハ悴の猿の助おれも又網打七五郎といふ漁
師のがさて産れ立から手が長く小猿と仇名の七の助盜
み心のある所までまんざら縁のねへこともチエぞんぞ
おれも未始紅關白にでもなりてへものだへん看板着が
あきれラア」と獨語と言つてゐる處○二重廻りの三尺
に千本の草履江戸ッ子丸出し又形容をかりであく言詰
廻しも随分意氣に出来ました△小猿七の助といふ名前
から趣向と立て世話狂言の中へ一幕の夢の場を挿み時

代めいたことと書込で見物の目先を變た作者の妙案感
伏々々○此處へ奥女中菊川與役人助平仲間可内と連て
出あり助平と始終菊川は顔見とれれかしみの言語
いろくありて永代橋を渡つて平舞臺へ來り七の助と
通りそがる七の助は菊川の簪を抜ふといふ思入其顔と
見て好い女だといふこゝろし能き處よて菊川の草履の前
鼻緒切る可内がその鼻緒と直そといふのと助平が強く
引取りこれをそげる此間もいろく忌味の滑稽あり助
平とヤガテのことと鼻緒と直し菊川にこかせる菊川が
其草履を頂くとタンと助平菊川の前と捲つてのぞく菊
川吃驚アノと前と押へる此透を伺ひ七の助菊川の簪を
引抜き橋を渡つて逃る菊川は頭を探つて簪を取られ
たるに氣がつく助平氣を揉み可内に騙取の跡を逐とせ
やうとそるを菊川押し止めその簪に己の紋處と名前
彫附てあるので後日何シツれ證據にありはせぬかと氣
に仕ながら△オツト此處が作者の用心後の脚色の伏線
といふもの○兩人を連れて向ふへ這入る○菊川粧飾萬端
先ッ大体△首の太いの生質で仕方があいがおマケに
鬘が少いので折角好い器量とだいなしお仕さのは誠
に残念△七の助に簪を抜れアノと吃驚してマツ抜れぬ

方へ手をやッて後お抜れた方へ手を遣り其間に七の助の遊る丈の余地と與へた注意頗る妙○七の助菊川の器量と見とれる様子簪と扱手輕井何も好く出来ました○助平さしたることをみけれども例もあがら自然の滑稽天然の愛敬求め内よ可笑味のあるところ當時三都無類道化の大隊長○夫より時の鐘詠への相方と成り七の助簪と手お持ながらッロ〜と橋と渡つて戻り菊川の跡を見送り思入あつて「年は頃と二十三女盛り御守殿風まだ男の味り知るめへがドンナやつが女房よとるか氣のわりい咄しだナア」と延上つてゐる處へ前幕の手代與四郎亂髪いくぢなき体裁にて辨應編れ片袖を持ち即ち(七五郎の單物の片袖あり)死ふといふ思入れよてヒヨロ〜と出にあり花道へ留り是より雙方苦樂の渡り言語(與四郎)「幾度思ひ直しても七十兩といふ金をおのが相籠で取れ上におまさまへの言譯に此與四郎が命を捨るより外思案とあるい(七の助)愚痴なことをいふよすがだが男お産れた上からとわんぢ女と一晚でもれのが自由と抱寐をしたら人は知らぬが死でもい(與)ドフで死なねばならぬもる此身に覺語は仕ながらもれた年よられた親父さまに只一日の御恩も送ら

ず先立ッ不孝が冥路の障り(七)迷ふ心おウツカリと顔に見とれて提灯の紋と心が附ぬも(與)盗んだもの、名と知らぬと引ちぎつたるこの片袖(七)八重橋と菊川といふ簪に彫のあるのが後日の便り(與)死んだ跡でもこれを證據に(七)跡から附て屋敷と見届ケ(與)此身の恨み(七)惚た思ひを(與)男れ一念(七)いつか一度(兩人)晴さおやれかねと七の助と簪與四郎ば片袖を持心々思入この時月と雲と隠れる(七)又雨雲にかくれし月(與)死ぬるお幸ひしむしの闇(七)灯影を自當に(與)そこしも早く(七)跡追かけて(兩人)チ、そふダと七の助は向ふへ與四郎は舞臺へ来る花道の附際にてアチコチとよけ合ひ與四郎橋の上へ行くと七の助振り返り「ねかしな風だがト橋の上と見る與四郎橋の上の欄干より南無阿彌陀佛と袖と持つたま、川の中へ飛込むドンと水音水煙りハツと立つ七の助思入あつて「ア身放げかト手拭とバラリと廣げると木れ頭向ふを見て「ナムサノ一町おくれたト手拭と冠り一散に向へ走り入る是にて拍子幕○七の助と始終江戸ッ子の意氣で手輕井仕打お骨折が見へました△そのせいお伊丹屋〜の掛聲はいふよ及之守高島屋〜と東京調子の掛聲も大分にか

りました○與四郎死ふと一圖は覺悟を極め魂魄脱てしよんぼりと出て来たところより花道に立ッての長言語トイ橋の欄子から身を投るまで申分なき大出来此人の此場は一日の花宗十郎九出し〜イヨ未廣屋
 △此場の與四郎と故人薪水は見劣りなしといつて決して過譽でありませんまい劇場通の大人方如何で五座る
 ○三幕目役人替名

奥女中きく川	中村飛鶴
手代與四郎	中村珊瑚郎
れ坊 吉三	同
若イ者喜助	嵐 三治
網打七五郎	中村傳五郎
横目 助平	中山文五郎
若イ者新吉	嵐 橋太郎
網打 源治	嵐 橋利之助
女郎 お杉	中村紫琴
小猿七之助	嵐 橋三郎

○深川洲崎の場

○雨軍 雷の音にて幕明バヤ〜よる序幕島崎屋の若者喜助新吉の二人出て来りれ坊の吉三がお杉と連て

逃たかど砂村の吉三の伯母の處へ尋ねて行くといふ拾言語雷鳴とことか可可笑味あつて兩人共下手へ這入る正面の黒幕と切ッて落と下手より奥女中菊川乗物に乗り前幕の奥役人助平を始め駕籠の仲間二人提灯持の仲間一人附添て出て来り同く雷鳴と恐れる可笑味あり土手の上まで来かゝる折柄此時雷鳴一入さびまゝあるみなく柔原々々と能き處へ乗物を下を耳をふさいで振へてゐるドンと本鉄砲の音して近處へ落たる心助平始め駕籠の仲間二人いっさんよ下手へ逃て這入る提灯持の仲間一人駕籠の前にろつ伏お倒れてゐる雷の音雨車しだいに薄くありヤガテ其仲間起上り「今の一ツと強かつたが近邊に落たよ違へチエ」と竹笠を取ッて空を見る此時始て顔と顯す是則ち別人ならせ彼の小猿七の助なり是より駕籠の内より氣絶せし菊川を引出して介抱するいろ〜言語ありて土手を下り水を口ぐ、みにし來り菊川と起して口ろつしみ水を呑し菊川の懐へ手と遣り胸先と押しあがら顔をシツと見る此時雲晴月出七の助思入あつて「ア、い、女だナア」となまめかしき相方おなり菊川を抱えめる是にて菊川ウンと氣がつく是より七は助菊川と取へて命の親のお禮ならドウツ

一晩しつぱりとお情かけて下さりませとトウかゝ惚
るる心中と明し「おめへの方じやア知るめへが忘れも
しねへ惚れさのとしかも盆の十三日と誂への相方ある
り七の助笠と尻お敷て居り思入あり」所は名も負ふ永
代橋晝にも勝る月夜にふつと見たのか縁の端云々の
セリプあり其時振た此簪とカマヌ烟草入より簪を出し
て見せ「八重 橘へ文字入りに菊川といふ名前が知れ
雲間の月れ見へ隠れ跡から附て屋敷と見届けそれから
直も足をつけ手廻り部屋や大部屋で承知でまけて部屋
子とありてゐるついでぬた甲斐あつて菊川様か砂村へお
見舞に行くお供が足りぬ困ると聞て「幸と紺看板にま
んぢり笠提灯持も雇れて来たのもこつちの一六勝負と
ふかしなら是迄の追目もひよつと出やうかと思つゝ
坪よ目が立って長と半との差向ひ四比五の言とすゝ菊
川さん一番うけさしてくんあせへと片腕脱ぎ尻をまく
り急度思入菊川ツツとする思入是よと菊川之言詫けの
良人のある身も忍堪忍しくれと謂ふを七の助の先刻
おぬしが氣絶えてゐる内云々またからトウお操と破
つてゐるモウ此うなつたら往生しろと遊んどする菊川
の帯の端と踏へ「いくら泣てもわめいても町と離れた

洲崎は土手晝でもあるか更る夜も往來まれ雨上りし
めりがちある汐風にどぎれた雲の星明りかすかに聞へ
る辨天の茶屋の端唄や中木場の木やりは聲を寐耳も聞
いなど、ヤ心つた、と割床と露の情の草枕れぬしとまづ
ぼり濡る氣だがドウで汚れた上うらと爰で器用お抱れ
て寐やれ云々とは是より手込にしても抱てねると無理往
生に口説きつけ思がる菊川の手を取り上手の小家へ引
込ふと戸と明る内よと序幕の吉三とお杉と寐てゐる雙
方吃驚互に顔を見合せ「チ、小猿の七か」お坊吉三かと
是より吉三はお杉を連出し砂村の伯母の處へ忍ぶつも
りで來掛る途中雨と雷を避てコ、へ這入ツイ寐て仕
舞つたと今晚の仕宜を話すと、七の助は菊川の手を取
り吉三お杉とお杉は外へ出て兩人の噂され杉は菊川の溜
しておきし紙を見附け小家の中へ投込でやる是より吉
三お杉の兩人氣を揉み小家の側へ互も伺さよ行き立開
にもくこと兩三度ありド、兩入手を取ると土手の上へあ
がりれぬてある駕籠の中へ這入らふとぞる處へ下手よ
り以前の若者兩人出て來り吉三と取へて杉と戻せど
いふ戻さぬといふト、吉三刀を抜き兩人と相手に立廻

りの最中ね杉と駕籠の中へ隠れる折柄上手より以前の
駕籠の仲間出て来りその駕籠をかつぎ上手へ這入る引
續て吉三は二人の若者を透驅て上手へ這入る時の鐘
への相方にあり普請小家の戸を明て七の助菊川出まな
り兩人流れにて手を洗ひ互ひに顔を見合せニッコリ笑
ひみまめがしき思入菊川は言號のある身で外の男も隨
ふては女子の操が立ぬもゑドコへなど連て行つて女房
にしてくれといふ(七の助)も其意に任せ(コノ間いろ
く)セリフあれどくたくしく且ツ忌味澤山もゑハハ
ヨル)(七の助)ソナナラ是か(菊川)すこしも早く(七
七)ドレ道行と出かけやうかと時の鐘の相方よて兩人
身ごしらへする此時向ふより以前は助平沼へ落たる体
よて顔も手足も眞黒に成り出て来り「ヤレ」今の雷
で沼の中へたつちて泥水を呑た上鼻の穴へせせうが
這入つてむづくと悪い心持だソレソレウと菊川殿と
どこへ逃てムツたか若も行衛の知れぬ時と此助平が扶
持は喰上げア、鼻がムツくして成らぬと言ひながら
本舞臺へ来る七の助菊川向ふへ行ふとすか玄見
て(助平)ヤ菊川どの(菊川)エ(助)ヨク爰も待つてムツ
たト菊川を引留る(七の助)エ、寄りやアがるなト突の

ける(助)ヤわりや新參の中間めサテハおのれが菊川ど
のを(七)チ、引攪つて女房よとるのだ(助)エ、身共が
心と掛たるよト留むるを(七)むだ事だ放しやアかれ
と振拂ふ助平又留るを立廻つて蹶倒を是よて助平ウ
と倒る、(菊)此間に早ぬ(七)ム、大べら坊めト七の助
菊川の手と引き一ツの赤合羽を二人りで被り足早も向
ふへ這入る助平氣がつき起上りサテワ二人と逸失たか
トのび上り向ふを見てハツクシヨと一ツくしやみをす
る鼻からせせうが飛出た「れ前を待々の踊りでどせ
ろを押へる思入是にて木の頭〇七の助は前にみ評をし
た通り言語萬端江戸ッ子の仕打お骨折が見へました△
お前の方でい知るめへがト赤合羽と取り所も名お負ふ
といふ言語で簪を見さるところ菊川の帯を踏へて「イ
クラ泣てもわめいての言語の處いづれも好く出来ま
した△成ふことならモウ一層意氣遣つて貰ひたかつ
タといふ東京子も有つたが是とナト御無理△然しドコ
や益替にやられた里見伊助の面影があつたやぞだ〇
菊川と御主殿風よて年よ合してと萬事ればこい仕打宜
敷△七の助に無理往生よ口説きつければ普請小家へ引
き入れられる震へ工合中狂言の内記震へ方より余程

さまく出来まゝド、普請小家から出て愧かしい思入
れ七の助もチヨイともたれ「モシあつらムンしたねへ
の氣の替り目見物一同喉どあふしました△トワいふも
の、髭と小サく喉は太くチマケは言語の度に格別咽と
ふくらすよとチト閉口○オット東西○吉三は七の助と
の挨拶よりお杉どのイヤつさ二人の若者を相手に立
廻り引込までサシテ評する程のこともなし○お杉と仕
打とろまくこなされるが何分容貌が中位る（是と仕方
があるが）夫も髭附より衣裳萬端の好みが悪かつた也
ゑドウも感心仕あかつた○助平と泥まぶれの形で鼻よ
り齧を出しおまへと待の踊の幕切一人て舞臺一杯棧
敷も土間も笑はるい人はひとりもあかつたお家と

○道具替って同土手裏れ場

○詠への合方波の音より下手より丸物の漁船へ網打
七五郎と網打源治と兩人乗て出来り宜敷處へ船を上げ
械を立て七五郎摺火打で烟草を飲ながら源治を相手に
いろ／＼のセリフの内博易は負た話になり十日余りあ
七十両イヤサ七両むかり取られたと謂ひながら四傍へ
思入あつて芝浦へ行く積りけ船が汐を測つて洲先の土
手下へ附しは驚き余り暗いから切揚て歸るといふ何ッ

一本大キナ物と引ッかけて歸りてへものだと源治は進
められ七五郎とそんなら二三番やつ附やうかど是より
時の鐘ドロ／＼のやうな浪の音とさ合方お成り網を
打ッ△網の捌方から打やうまで中々手に入ッさもの○
網を寄る思入あつて源治大きなものが掛つたせと段々
と引上る源治の氣よまて何ンダ／＼と尋ねる七五郎は
何ンダか眞暗で知れねへがそてきよ重いとひながら
網を引上る序幕の與四郎片袖を持たま、此網へ掛りズ
ツプリ濕て裏向よあつて顯る此時上手より川施餓鬼の
燈籠が流れて来る七五郎「何ンダか知らねへがそてき
に重い」と川の中を急度見込む件は燈籠真中へ來り與
四郎正面を向く額の疵の血汐あり／＼とサモ物凄さ顔
色よて七五郎と急度見上る七五郎「ヤわれとと網を引
そ與四郎水の中へ沈む源治この様子を見て親方氣味が
悪いと是より與四郎が身投の晩に丁度永代橋の下へ舟
を維ッてゐて浮上つた死體と見たが其晩か今夜まで
モウ十日斗りの日數の立ことにこの暑いれに腐りもセ
サ額の疵まで生々しいのと何ンでもアノ死骸と只事じ
やアねへとコワ／＼話えてゐる折柄の中の内刻上
る源治これは悔りして「ッレ出とと逃る拍子に海の中

へ落る七五郎胸りして憶病な奴じやアねへかど械と取
 ッて海の中を捜し思入れ「源治か〜しつかりしる意
 氣地のねへ奴ダナアと械と引上げると又もやこれ械へ
 與四郎そがり上る七五郎見て「ヤコリヤ源治と思ひれ
 外」與四郎片袖をさまつけ七五郎を恨しッウに見て「七
 十兩を返して下せへ七五郎思入あつて「サテハ己は迷
 ヲつてゐるな（與四郎）われに恨を晴そふと宙宇も迷ふ吾
 魂魄（七）何と小癩なト械を海へ突込みヤガテ引上る與
 四郎裏向にそがりて又々上る七五郎「キリ〜往生し
 て仕まへト械を引たくり與四郎と海へ打落し械を突立
 海中を屹度見て「はテ執念深ニ奴ダナアト見得此時上手
 の枯蘆原を押分け與四郎早代りのお坊吉三半身を出し
 て見得是より七五郎と吉三ダンマリ摸様の立廻りトド
 七五郎土手よりそべり舟中へドウと落る土手の上れ
 吉三刀を抜掛る七五郎小べりへ足と踏出して急度見得
 是にて木の頭浪の音本釣鐘にて拍子幕〇七五郎は始終
 サラりとし〜仕打別段評する程のこともなし〇與四郎
 早替りの吉三もマヅ大抵是又評するどころなし
 〇四幕目役人替名

御主殿お熊

中村飛鶴

娘	ね	浪	嵐	璃	幸
坊主	教真	嵐	笑之助		
小坊主	眞海	嵐	小笑		
女郎	おさめ	中村	嘉吉		
倉ヶ野屋	義兵衛	市川	市十郎		
女郎	お直	尾上	當見治		
露路番	の市	市川	瀧助		
坊主	海興	阪東	喜多六		
賄	ヒれすて	嵐	橘利之助		
小猿	七之助	嵐	橘三郎		

〇三日月長家の場

〇幕明く路次番の市「廻ろろ〜ト鉄棒を曳て上へ這
 入る町人体の男四人御主殿熊の噂をしながら廻る長
 家女郎れさめれなを四人を執へて上れといふ上ふぬと
 いふ可笑味いろ〜ありト、一人の女郎一人け客の懐
 へ勤めがあるかないかと手と指込み書附を引出し外け
 女郎の文だふふか〜讀でくれと路次番の市に渡すオツ
 と合點たど市が請取り開て見て淨るり名題と大夫の連
 名を讀み隣の店お新内の坐敷があるといふことを知せ
 皆捨文句あつて店へ這る路次番の市は上手へ這る揚

幕の内より葛西善導寺本堂建立ト言ふが向ふより年
嵩の坊主海典青坊主教真小坊主真海下箱を首にかけ本
堂建立の幟をかつぎ出まなり海典と生酔の体三日月長
屋馴染の女の處で一才と一切り遊んで行くから附合へ
と思がる教心を無理にひつとり小坊主真海に教真を推
させ舞臺へ来る以前の女郎おなをおさめ二人の容を送
つて両方の店より出て来り二人の容と捨セリつりりく
下手へ這入るおなとれさめ海典を見て言とかけ海典の
指圖に隨ひ教真は上れと進める教真は否だと押問答の
處へ路次番の市出て来り教真は無理往生に上と云ト、
おさめお直海典教真真海打連て店へ這入る市と下手へ
這入る此時向ふより小猿七の助中月代意氣なこしとへ
頬冠として来り「三年越上方の方へ往て久しふりで歸
つて見りやア」云々の言語あつて舞臺へ来る此時上手
よりお熊出て来り「すかあいのヨ一の捨言語にて鹽花を
振り七の助と見て町人さん一ぶくのんでれ出ヨと袖を
曳く七の助お熊と見て「手めへお熊じやねへか」「ソ
フいふお前と七さんか」「コンしづかにいへど是より両
人床凡へ腰と掛け互にそぎこし方の積る語をあしとい
七の助「あがつべいかと田舎者の思入にて手拭と冠る

お熊「ハテマアお出と云にと七の助の手と引て上手の
見世へ上る流行歌にて引道具廻る〇七の助蕩樂者の粧
飾万端帯の神田結びなぞと取譯受ました履物のひさず
り下駄も随分好いが是と矢張り故人高島屋の形でやけ
よひやめし草履の方が好いやうだ△仕打と別と評する
處もなし〇お熊は御主殿といふ字のつくいる通り意
氣の内お少し堅氣の雜る様子受ました△着附が婀娜せ
いか菊川の時より一層女振りば好く見へたが根の横櫛
は半纏もので丸でお富といふ粧飾とドウいふものだが
アレでと倉ヶ野屋の女房と見へるが長屋の女郎とは
見へあかつた△床几の上で兩人が久々の情語情愛タツ
プリ△海典教真真海の三坊主は別と評する程のことも
なし

〇道具替つて倉ヶ野屋内れ場

〇亭主義兵衛帳面を附ている賄ひ女お捨茶をほろじて
いる向ふお娘の按摩お浪杖と突き笛を吹て出にあり舞
臺へ来る義兵衛お捨よお浪を呼入させ療治をさせる此
時隣の二階にて「夏夜夜の蚊遣りの跡のうた、寐も座
敷々々もしづまりて」と藤桂の新内始る折柄海老長の
若者臺の物と持て来るお捨臺の物と持て二階へ上り是

より二階では七助が熊を捨三人酒盛にゐる下座敷では亭主義兵衛横よりお浪も足をもませる二階で七助の助か熊酒盛を去ながらいろ／＼いちやつきありお捨見兼て癩といふ此時下手の屏風と明ておさめ此坐敷へ附込む海典跡を逐て出るおさめ遠慮なし酒を呑む海典「コレ手前をかり看ねへでおれにも吞せてくれろと坐る下坐敷はお浪義兵衛の足を揉ながら居寐をそる義兵衛小言といふ此時上で七助の助か熊新内節と聞ながら思入下ではお浪義兵衛の肩を揉ながらそこらを探り廻し思て火鉢の傍にある金包をさばり思入あつてツツと取り袂へ入れる上でおさめ海典お酒を飲せるお捨邪魔をそる可笑味海典酒を酔おさめを連れて部屋へ這入る下では義兵衛はお浪の療治がサツパリ利かゐるからと斷を謂ひ錢を遣るお浪おその錢を貰ひ前に盗みし金の包をツツと袂より出してひとつに巾着お入る其手の震へるのに義兵衛と目と附邊りを探し金の包のさい思入お浪と執へて盗んだ金の包を出せと折檻するこの聲と聞附二階からお浪おさめお捨下りて来て其譯を尋ねお捨お浪の巾着を改め件の金包を取出して義兵衛怒つてお浪は横顔をくらわお浪と、さんの

長の病氣藥の代に差支へツイ出来心の盗みも堪忍しとて言をつくまて詫る此物音を二階の七助の助が聞附け透し見て恟り「ヤありや儲よおれが妹をふして目が潰れたかコレ熊」とお熊にさ、やう詫をしてやつてくれと思入下では義兵衛はいよ／＼腹を立「何だ親の病氣で人參の金があるから盗んだのだと太エことをぬかしやアがる夫じやア世界よ病人の親ともつた奴は皆んな泥坊とそるわへといよ／＼腹を立重ねて長家へ這入らねへやうよ路次番へ斷つてやうふサアうまやアがれどお浪を引立る處へお熊二階を下り義兵衛と留め田舎の客人が按摩が欲しいといふからどお浪と連て二階へ上る義兵衛とお捨に按摩をさせるお熊お浪を七助の傍へ連てゆく是より七助の助は始終田舎者の思入他者が親父様子と尋ねサマ／＼に恩め金を包んでやるお熊も親味も可愛がるいろ／＼の愁嘆ありてト別あなるお熊「ホンニとし此子の身の上げ七助」便りに思ふ兄弟の行衛と知れ目見へお熊「たつたひとりお父さんは(七)長の病氣に朝夕の(お熊)煙りの代よ(お浪)あんな世渡り(七)思へん因果(三人)身の上じやあなアと是にてお熊お浪の手を取り二階を下り門

口へ連て出履物をこりせるお浪袂より笛れ出し吹さな
が杖をつき向ふへ這入る七の助十分愁ひの思入お浪
を見送り屏風へ這入るお熊門口に立て是も愁の思入お
浪は跡を見送っている此時新内仕舞なる寐ていた義兵
衛起直りお熊に今夜の容と誰だと尋るお熊慥か田舎者
で有升よとツイと二階へ上り上手の屏風の中へ這入る
下手より路次番の若衆出になり會所に寄合があると知
せる義兵衛仕度を仕替へ一本キメ込みね捨お熊の容
に氣と附ると言置て下手へ這入るのうれん口より以前
の教真真海の兩人出になり△早く歸らねばお住持さ
まへ濟ぬから歸るはどに連を呼でくれといふ相方お
なを今夜泊って行けといふ行ぬといふ此問答と聞て
海典出て来りいろくせりつあつてトド教真真海は二
人捨せりつよて見世へ出る海典と本意あげおアノ教真
坊主と已と違つて若いくせに辛抱人故金と拵へて胴巻
に入れて持っているから遣はせてやふと思つたにいま
くしいこととしたと愚痴をこぼしながら相方おある
とよ連られて二階へ上り捨文句あつて後口の屏風へ這
入る七の助此の海典の獨語を聞く思入「さつさ初て妹
の咄しで聞た親仁の病氣人參を吞せる事は金がなけり

やアならあいのこと久しく便りもしない親仁とふぞ
して其金をこしつへて遣りてへものだと色々思入此時
教真が落ちておるた珠數を見附てお熊とらせてツツ
く見て言語あり此珠數の落主教真と辛抱人で胴巻へ
金と入っていると海典とやらの今の咄し此の珠數と種に
遣つて其金を取つて親父に貢げと勧められ其氣に成つ
く珠數を懐に入れ身こしつへをし容子に因つた殺
えてもといふ思入「大事の親の命は瀬戸事によつたら
しくの捨言句あつて二階を下りお熊に出お包丁と出さ
せ手拭と一處に手に持ち振廻しるがら手拭で包む思入
足早よ向ふへ這入るその跡よてお熊は拾ひし守袋と
取出し「此守りと落したとさつさの坊さんが落したよ
違ひない明て見たらば定て様子が」と中と調べて見る
と神田三河町三郎兵衛三の助と書附てあるので水子
で別れし吾弟なることと知り知らぬこととて七さんが
金がやしさお追かけて行しやんした若やアノ子の身
の上お怪我あやまちコリヤかきしてこいらぬわい」
とソコラお有合大紋附の半纏を身にまとい「是か直
よ七さんの跡追かけてアノ子の身の上ちつとも早くト
拔足として門口へ出る此時下手より義兵衛出て来るれ

熊胸りして行燈を消し義兵衛とすれ違ひ半纏と被り花道の附側までもく義兵衛行燈の消てゐるのをいぶかり點燈と呼ぶれ捨手燭を附て出る熊その手燭を目がけて物と投付る是にて又も暗黒にゐる義兵衛れ捨吃驚る思入お熊一散に向ふへ這入る是めて拍子幕〇七之助妹のれ浪に逢ひ父の病氣の容子を聞き悪人あがらも善心を起こし様子宜しく又意氣あ内に態とチヨイ〜田舎者の不器用を調子をこめる處れ骨折々々〇ね熊れ浪が義兵衛を折檻さるゝと憐れ中裁に這入る處又れ浪を慰る情愛親切の様子受ました〜〇兩人共其余は前不評をしてれきました〇義兵衛と体格といひ調子といひ定めし大福屋惣六か福清の形でやられるだらふと思ひの外元が上州の長脇差だといふ處に拘泥たか丸で赤間源左衛門といふ様子でやられました元と元でも今は倉ヶ野屋といふ長家の亭主も最りそこし仕打を意氣に和らかに遣て深底お憎味を見せて貫ひたかつた△左様々々れ浪を執へての折檻がサ〜やられた割と一向こたへせ又僅か盲の小娘一人を會所へ引張つてゆくもチット仰山とされた△又熊の仲裁と聽きた熊手前がそんゐに詫ることだからと許してやるところ親指が口説

といふ前ふた熊のセリフもあるものだから今少し色氣を持つて忌味あやつた方が宜つたらふ△熊がね富丸出したから義兵衛の赤間模様も尤もか夫にしてい七の助が與三郎といふほど意氣でなかつた〇オット贅談はれ廢し〇ね浪は年頃かゝ粧飾万端江戸の貧乏人の娘ツツクリ又粧飾をかりではありません親思ひの情愛より始終盲の仕打精細々々△火鉢の上の金ツツとどる處鮮明々々又夫より貫ツツ二百の錢と一處お盗た金を巾着へ入る處ブル〜震へるがら白目をグル〜むいて見へあゝ眼で義兵衛の顔とシロ〜見る容子妙々熊に救されて二階へ上り七の助に家の貧苦と父の病氣を物語るまで申分るし此人此役と一日の大出来〜〇ね捨れ加役耳の遠くて聞け振てる工合好つた〜〇海典の蕩樂坊主は此人の持前少しあくどかつたか先ツ出来の好い方

○五幕目役人替名

- | | | | | | |
|----|-----|---|---|----|---|
| 女郎 | お杉 | 中 | 村 | 柴 | 琴 |
| ね坊 | 吉三 | 中 | 村 | 珊瑚 | 郎 |
| 娘 | お浪 | 嵐 | 璃 | 幸 | |
| 法 | 印 | 市 | 川 | 龍 | 助 |
| 大直 | 銀太郎 | 嵐 | 橘 | 治 | |

倉ヶ野屋義平	市川 市十郎
網打 源治	嵐 橋利之助
庵主 西念	大谷 新左門
網打七五郎	中村 傳五郎
小猿七之助	嵐 橋三郎

○深川大島町七五郎内の場

○幕明く三幕目網打の源治外に若者二人都合三人出になり網打七五郎と娘のね浪は噂さ又相長屋に死人れる噂のせりつあつて若者二人向ふへ這入る源治と七五郎の内へ這入り七五郎ね浪と三人いろく愁嘆の言語あつて源治下手へ這入る引違へて奥より三幕目のね杉出て來り七五郎の病氣でやつれたのと氣の毒がる七五郎もね杉の苦勞しよのを不便がる是よりね杉三年跡よ品川を欠落をしたねり菊川の駕に乗り千葉の屋敷へ連て行れ部屋頭に貫つてもととい吉三と一所あり所々方々と流浪した身の上話とする七五郎夫を聞いて身につまさる、思入ね杉にサツ活計は困たらふと尋ねられ「ソレでもまだ天道さまに見放されねへ處があるかね涙が毎日あんまに出て二百と三百取つて來るのでマア喰ふやア困らねへト娘の孝行話をしくる折柄胸へさし込が來て苦むね浪胸をささる「困つたものだねへと言ひ

ながらね杉下手來り掛竿にかけてある單物に氣がつき洗つてゐる遺ふと手を取り洗ふとして其單物の見覺へれある與四郎の單物あると怪み與四郎さんて聞ばアノ後身を投て死だどやらいふ噂さドウして爰にこの單物があつたかと怪み氣味の悪い思入此時隣家の枕念佛始り木魚の音する向ふより一人の法印出て來りね杉が病人があるからと斷るをも聞入ず病人があるなら猶更祈禱としてやると内へ這入り家捜しとせる思入出て行け行ぬとお杉と法印と押問答の最中三幕目の吉三出て來り内へ這入りいきなり法印と撃倒すこの勢ひよ恐れて法印向ふへ逃て這入る吉三其處よあつた長半纏を取つて着替へ今まで着てゐた衣物を附て來た若者お渡して還と是より吉三お杉に向ひ博易に負て來た話として兄貴の所へ金を借に行くのに長半纏のこの形で行けぬお杉お杉の着ている衣物を借せといふお杉と是を貸しては着る物があから思だといふ是非借せ貸さぬの争を七五郎が聞かねて中へ這入り吉三よ今夜は他へ行くことと休て中直りよ内に寐ると勸める吉三は小遣ひ錢にも困るから是非おきたいといふ七五郎夫と聞てソウきいて見れもつともだから何ッ貸して上

たいものさかと思入此時上は押入よりお浪序幕七五郎
は弁慶縞の單物を持つてさぐり／＼出て來り「モシと
ッさんつゝらの中お是があつさから是を貸てあげろと
出と七五郎これを見て「ヤこれと引たくり遠て、寐
床へひきづり込み「コノ尼ッテヨメー余計なことをし
やアがるおと阿り附る○此處は仕打間に髪と入をい
ふ程のキハドイ鹽梅奇妙々々吉三その單物を見て「ッ
リヤアいつか手前が着ていた弁慶縞の單物丁度い、か
ら貸てくれといふ七五郎と「サアちつと是はト切あ
お入お杉これを見て「七さんもその衣物と何かかしよ
くいことがある様子仕方があは是を着ておいでと帯を
解にかゝるを七五郎これを留め此單物を貸されるいと
いふ譯と片袖がムりませぬと廣げて見せる此片袖とド
ウしたのだと吉三に尋ねられいつか品川から歸りがけ
喧嘩をしてちぎられたとその譯を話し「モウ三年もた
つたからト一調子張上げヨモやえれまいといふ思入○
請ましたく○是でよくむ着てお出なせへと放り出す
「好どころか結構だと吉三是と着替へ腕まくりとして
ぬりやアちつとも知れぬへと言ふがら向ふへ這入る是
よりねるみ吉三の落してをぬた守袋を見附るお杉これ

を持つて吉三の跡と逐りけ早足で向ふへ這入る七五郎は
大層蚊が出て來たからお浪木挽の人よ貰った挽屑を持
つて來いト一升拵に入てあるそこしむかりの挽屑と取
寄て枕頭よをぬてある淫囊火鉢へ薰る是より七五郎お
浪を相手お愚痴の愁嘆「おがみを上げて直寐るからま
ア手めへ先へ寐ろトお浪と先へ寐かそ處○今晚は泊り
客があるから手前ばコンを枕にして寐るとお浪の木枕
と取上げ代りに挽屑を入てあつた拵をあてがひ痛かる
ふと手拭を當てやり又蚊屋が無へから嘸蚊にくわれる
だろと已の病苦を忘れて破團扇であふいでやり又寐
びへそるから踏脱なよと半纏とかけてやる處親子の情
愛いかにも此うありそふなこと、坐み涙と催ふしまし
た△昔し龜藏がやつた時には挽屑を薰るところやお浪
にマス枕にさせる細い仕打はないやふでしと又お浪
が片袖のない弁慶縞の單物を持出した時にも「ヤこれ
はト胸りの思入をかりで「コノあまツちよメがと遠て
、寢てこへ引張りこむ仕打もあかつたと思ひました彌
出と彌奇ありとはコ、ヲのことでしよふ△いかさま龜
藏のやつた時にはお浪枕はたしかく、り枕のやうで
ありましたまだ小娘のことおるく、り枕もあどけなく

ッて好いやうであります○是より時れ鐘の相方になり
下手より以前の源治鋳をふりながら出て来りこのころ
と物騒だから云々の捨文句あつて路次をめぐ下手へ這
入る「いとやさへ秋と哀れも鳴鐘の音もかすか消殘
る燈籠の影にしよんばりと病み勞れたる七五郎娘の寢
顔打見やり」トいふ淨留理ある七五郎「ひるの勞れに
すやくと横も成るとたわいはあゝまたマアこいつと
佛だナアといふ處場中一統しんどいたしました是より
お浪の寢息を考へ佛間へ向ひ合掌あし南無俗名與四郎
どの頓生菩提南無阿彌陀佛々々々定めて悔い一念で宙
宇も迷つてゐるで有ふ其報ひにて三年此方晝夜わかた
ぬおれが苦み其上娘の目が潰れみじめを見るも身かた
出さ錆どおれと觀念しているから取殺そなら與四郎ど
のおれ計り取殺して娘ハドウツ助て下せへむりなこと
だが頼み升云「ア、是よつけても物領の七の助はドフ
しよか三年こつちへ噂もさかぬが達者で娑婆も居るこ
どかドコツで切られて仕舞やアしねへかア、子を持って
知る親の思と能くいつた譬だナア云々と獨言と言ひ
ながら愁の思入向ふ揚幕の跡次を乗越し七の助辨慶縞
れ衣附めて出て来り門口へ来て内とのぞく思入れ七の

助トッさんく(七五郎)誰だ(七の助)わつちでムリ升
トいふ顔と灯影透し見て七五郎「ソッいふ聲ハ七ビ
やアねへかと思とづ知りづヌッソと立揚り二足三足歩
いてストンと空伏に倒れも處〇戀しいと思ふ矢先へ吾
子の顔が見へたので病苦も疲勞も忘れ立上ること
立上つたが何しろ三年越の長病も足おそしモ力ら
るく直も倒れる工合絶妙々々〇是より親子久々の對面
△七の助内へ這入や否や煙草盆の火入と取て尻廻
追手の用意といふ思入請ました〇二十五の曉を
越去赤の飯と焚て祝つたが是むりり設けものさとい
ふせりふ蕩樂者の眞面目〇サテ(七の助)互ひに生て居
りやアこそ明日にも知れねへ命でも(七五郎)親ハ泣寄
り此様に(七の助)夜るでも忍んで逢れるのだ(七五郎)
マア何にしる手めへも達者で(七の助)お前も生ていて
くれて(七五)こんち嬉し(七の)ことねへと手も手
を取って親子は落涙〇サスガ悪者でも親子の恩愛に變
りはあゝいもの歎と覺へず鼻が酸くなりまゝ△鬼れ眼
に涙とどこのこと〇夫より七の助「長煩ひで困る
だらふし薬れ代もるだらふりかど金を出してやる七
五郎その包を請取りナヨツと目方を引見て「コリや

ア余程ありそふだといふ處○是も湯樂者の思入宜ツた
〇七五郎ハ思入あつて七五郎「晝間晴て歩けぬ程
悪事があるといふかゝやア定めて今夜の此金也」○
子を見ること親おしかせ(七の助)「ドフでわつちが持
て来たから清イ金じゃアねへけれどおめへダツて堅ひ
じやアなし通用セエすりやアいひじやアねへか○此親
よして此子あり○△ 通用せへすりやアいひじやアね
エかどのセリフ實は惡漢の口氣寫得て妙々〇七五郎思
入あつて「志しは辱いしが長頼で氣がをれて是まで人
れ目をかすめ多くの金を取たもる報いで娘の目がつぶ
とする癖とねへ手めへもドフツ心を入替夫を路用よ逃
てくれ江戸にまごゝしていたら探川無宿と捨札に名
を残さよやアなるめへせをれが手本だ思ひ切れト泪な
がらよ意見するハ人の將に死あんとそる其言や善玄△
人れ性と善△オットそんなむづかしいことハ吾等達に
と御通用あしだがれが手本だ思ひ切れと實に切あ
い言語人の親とし其子よ意見するのは悪いことをす
るあ己が手本だといふ心地はどんあで五坐りましよう
世間のね父さんお母さん小兒のために好い手本になる

や字御注意よよ西洋人の訓誡にも小兒の第二の吾と
いとことがあります○是ハシタリ言語の評は止よして
藝道の評を願ひ升〇七は助是と聞て思入あつて「つま
らねへ事といひねへな今たれが切上たつてドフ此首が
繼れるものか又お前ダつて同じこと長生をそる氣かし
らねへがおれが目で見るときハドフで長い事ハねへせ十
日のものなら二十日生延るのハ藥の力ダわりいことと
いわねへからは是で高い藥と吞一日でキ生延てやめへも
のでも喰ふのが得とつさんおめへも年のせいかけちな
心にあツタなア△道理に欠たる言分ながら是も亦親を
思ふの實情○夫より七五郎と暫く思入あつて點頭き析
角手前の親切だからと其金と納め己も養生をして生延
るかゝ手前も逃られるだけ逃延てくれる己と先のねへ
體ダが手前とマダ老先のある身ダからドフツ生して置
てへト言ひながる寐てゐるおあみを指さしコレ七や見
てくれおなみとコンナよ大きくあつたト是より目が潰
れてから按摩を覺へて己をそとして呉るとお涙の孝行
を賞め兄イが来たからト起しにかゝるを七の助と夕邊
吉原の三日月長屋で他るが逢ツたからとおし止め是
より七の助と氣を變て七五郎は向ひ「三年越れお前れ

病氣又妹の目の潰れたのと只事とて思われねへが何ッ
死靈の崇りでも受ることがありやア志ねへかど尋ねる
七五郎と思ひがけなきことを尋られて胸りする思入サ
アないでもねへがト云に謂はれを胸へ指込か来て苦し
七の助は夫なら覺があるのかへサア其譯をど介抱しあ
がら迫る此時寐てゐるお浪が忽大聲を發し「其譯いふ
て聞かそふかといふ七の助」ナンど、愕りする「七五
郎ア、苦しい〜といよ〜苦む此内おなみはひつと
と起上り潰れし兩眼と膝と見開き顔色變つて死靈に乗
移りし思入サモ寄らめしそふ七五郎を眺み「忘れも
せぬ三年跡云々ト七五郎に七十兩金を盗まれ主人へ
言譯なさに永代橋より身を投げて死ンダ其恨と晴そた
め憂目を見せるトさも恨めしツツに齒がみとまゑがら
いふ七の助之胸りなし「死靈を拂ふは此守りと守を取
つて指附る是あて死靈は放れおなみとそそのま、倒れる
七の助は是あて與四郎の崇りといふことを知り恨のも
尤だと思案を七五郎漸く正氣づく七の助之介抱しな
がらア、いふ死靈の崇りがあるから薬よりと神佛の
力をかりるのが第一だかト信心を勧める△苦しい時
の神頼み〇七五郎は信心も仕てへけれども何分長の煩

ひで出来ねへドッで己この死靈の崇で死ぬ覺悟ダか
ら手前己に構えづよ逃ろといふ七の助と夫ダとイッ
て親れ死目を見捨て、行もそでねへ譯ト途方よくれて
思入折柄おなみが目を覺そ是より兄弟久しぶりの愁嘆
情誼トド七の助はお浪の手を取り「目の見へねへ上に
父さんの長煩ひでサツ因るだらふかられれも共く内に
ゐて力よなつてやりてへが少し譯があつてツツしてゐ
られねへから心細も父さんの世話とよくして上るとい
ふおなみと「ソソならお前は此儘内よゐてと下さんせ
ぬかど力を落す侍に見ている七五郎は兄弟の者の情を
察して涙おくれ「コレおなみ人間は老少不定といつて
十年を取たれが先へ死ぬか又若い兄が先へ死か命斗
りとしれねへから是が別れよなるかも知れねへトツク
リと顔を見ておきやレといふお浪と、さん私シヤ見
とふても見ることが出来ぬわいなアと泣く七五郎も「
一ト目見せてやりてへおアど是も泣七の助も泣く〇見
物も泣く〇是より七の助は人鬼はねへからモシ父さ
んが死んでも死のふといふやうな狭い了簡を出さお
又おれの戻つてくるのを待つてゐるとおなみと勵まし
七五郎に向イ「ソソレシヤ父さんわつちやアもふ行升

よと別と告る七五郎は「いつまでゐても名残と盡さね
へから夜の明ねへ内に早く江戸を離れろと思ひ切つた
拶揆をする七の助は如何も命が惜いからとて病人の親
と盲人の妹を見捨て行れるものかとトツオイツの思案
おなみと成ふことなす内にゐると纏る七の助と是よて
いよ／＼立兼ねイツツれこと内あゐるといふ七五郎は
それはいふぬことダそこしも早く送るといふ七の助ッ
ンでもど猶立兼てゐる七五郎と「エ、そんな未練な根
生じやア石を抱くことは出来ねへぞとト願す七の助と此
一言と聞て思ひ切たる思入（七の助）そんなら父さん（
七五郎）七の助（七の助）妹（れなみ）兄さん（七の助）所
詮婆婆じやア（七五郎）逢れぬへなア此内七の助は門口
へ出る七五郎は燈籠を提てヒヨロ／＼と見送る兩人顔
見合愁ひの思入七五郎燈籠をハツタリ落す時の鐘ねな
みさぐり行き（モシ）と留よふとそる七の助外より門口
とシャンとメるおあみハツと泣臥と七五郎七の助顔と
背けて泣く見得是あて道具廻る

○七五郎と三年越しの大病に顔色憔悴て形色枯稿たる
様子頭髮の葱々たる妻の詠へ頬髭の蓬々たる顔の据へ
胸骨の顯れし薄黒の隈取り欄褌の寝衣まで十二分御

注意受ままた／＼實に正真正銘の綱打七五郎病氣の体
にて更な俳優の傳五郎丈が份戲をしてゐると思はれ
づ又粧致をかりではなく始終の仕打より言語まで正物
々々奇絶妙絶と賞るより外申分るし此人此役は一日中
の大出来△かほどの長病人あしては体の動し方と言遣
ひが少し荒過たといふ評もあつたがソコが即ち江戸ッ
子の本性死ぬまでも瘦我慢の強いところを見たは却ッ
て此人の働さたふと吾輩共は格別感心をいたしまし
た△七五郎々々々町中で大評判とするのも尤も／＼
いよ東京々々△七の助と相手が七五郎のせいにか此幕
拾別宜しく出来ました○お浪前にも評した通り申分な
き上出来情のあるにかへす／＼も感心此様子でこヤ
ガテ立おまおななれましや宇頼母しい／＼○吉三と段
々破廉耻が増長して来る内にドコや夕昔しれ坊さん風
が残つてゐて底に實意のある様子マツ大底○れ杉別よ
評する處もなし相變らづ衣着と鬘か野暮て娼妓あがり
に之チト○何はしかれ此幕は當二番目狂言中の見處又
大入大繁昌も半と此幕を見んがための人氣ありとの大
評判橋三郎又傳五郎幸丈其餘れ骨折はいふよ及之迄
一ツと作者先生の妙案奇作評者も此幕よと役者は藝道

と勿論作者は脚色よついても件々評言を下したき處あれども余り冗長しきに過ると恐れて残念がらコ、ラ
デ提筆

○道具替つて露路次外の場

○ね熊を連出した出さぬの争ひよりト、七の助が倉ヶ野屋義兵衛を殺し義兵衛の手に辨慶編の芹袖を残して逃る途中坊吉三とそれ違ひ磔の幕切迄別段見處もあし義兵衛七の助兩人の立廻サテリとして好しハ七の助江戸ッ子の魂も見せて遣ふかど云ひながら遠と伺つて義兵衛の脇差を抜て一太刃切附るところ手早い仕打感心まました○義兵衛御苦勞々々々

○道具替つて西方村庵室の場

○庵主西念と七の助と因縁因果の長物語(庵主西念は與四郎の父菊川の舅教眞の叔父)ト、七の助は西念の慈悲心み今迄の悪業を感悟して菩提心を起し出家得度と遂ぐ此處以前の綱打源治來り七五郎おるみか身を投て死だ一部始終を物語る七の助之を聞いていよく身命を惜まぬ心になり名乗つて出ると立上る此時下手より捕手の役人出て來る七の助尋常縛み掛つて行ふとそる西念一旦出家せし者も愚僧が貰ひ受るとこれを止

める捕手の役人ハッンでもト引立にかゝる此處へ坊の吉三衣服大小立派な待ひの立立本の澁川吉三郎に成り七の助の赦免狀と持出て來り七の助の死罪と救と西念「悴がりたれし一念も七五郎おれが水死をむせせどあれを迷もせ時れ(吉三郎)「必佛得達成は必定(西念)流轉三界哀別離苦西へ導く亡キ魂の(七の助)因果は廻る車の輪(吉)是ど雲らぬ(皆々)鏡じやアアト此時ドロくになり焼耐火を空へ引上る(與四郎)得達の思入皆々引張よろしく目度打出し○七の助は西念と長物語の間情愛のあるセリヲ廻しお持前々々

○大切景事生人形千代松玉華麗々々別評する處もあし

投書人名

半鼻山人 一眼翁 豆田野勞夫 六二居士
芝井金太郎 四倍井數寄也 阿那尾 勇
半場劇史 芝井猫人 半日野夫 雜魚場市人

社告

○當評判記の儀は印刷の都合より發兌大に遅延お及
び候得共次號より之精々駿速に出版仕候間御愛顧購
求の程偏お奉希候

明治十二年一月十八日御届
同 二月 出版

石川縣士族

編輯兼出版人 岸村 誠 具

當時府下第三大區二小區京町堀通
五丁目十八番地園生壽三郎方寄留

京町堀通五丁目三十番地

假本局 金 蘭 舍

南地法善寺南横町廿三番地
去ばる珍報

製本發賣元 華本文昌堂

取 必齋橋通久寶寺町 前川源七
同 八幡筋東へ入 玉置清七
次 堂嶋中壹丁目 謙 雲 堂
所 備後町中ばし 泉 万 助
平野町御靈前 松本平兵衛

